

栗東市埋蔵文化財調査報告 2021(令和3)年度 年報



2023(令和5)年
栗東市教育委員会
公益財団法人栗東市スポーツ協会



②靈仙寺・繩遺跡 T1土坑他出土 赤色物質



②靈仙寺・繩遺跡 T11SE2277 出土土器



⑨下鉤遺跡 SD10・12・13 周溝完掘状況



⑦小柿遺跡 NR北西肩口SD出土円筒埴輪



表紙写真：②靈仙寺・縊遺跡
③下鈎東遺跡

栗東市埋蔵文化財調査報告

2021(令和3)年度 年報

2023年3月
栗 東 市 教 育 委 員 会
公益財団法人栗東市スポーツ協会

例　　言

1. 本書は、栗東市教育委員会と公益財団法人栗東市スポーツ協会が、2021(令和3)年度に実施した普及啓発事業と埋蔵文化財調査の概要報告書である。
2. 普及啓発事業は、栗東市教育委員会（栗東市出土文化財センター・栗東歴史民俗博物館）と公益財団法人栗東市スポーツ協会が共催した。
3. 埋蔵文化財調査は、滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東市教育委員会が調査主体となり、公益財団法人栗東市スポーツ協会が実施した。なお、国庫補助事業および市事業は栗東市教育委員会が実施した。
4. 調査体制は以下のとおりである。

調査主体	栗東市教育委員会	教　育　長	安土　憲彦
	スポーツ・文化振興課	課　　長	片岡　豊裕
		係　　長	駒井　美香
		主　　幹	雨森　智美
		主　　査	藤岡　英礼
調査機関（公財）	栗東市スポーツ協会　事務局	会　　長	竹村　健
		副　会　長	宮城　安治
		局長代理	千代　友厚
	文化財調査課	課長補佐	近藤　広
		係　　長	佐伯　英樹
		技　師　補	末次由紀恵
		技　師　補	遠藤あゆむ
		専　門　員	森　　智美

5. 埋蔵文化財調査報告書中の調査位置図は、指定以外全て5千分の1である。
6. 調査参加者は下記のとおりである（順不同）

調査補助員	雨森 泰良	稻本 直紀	井上留美子	宇野ちさと	大岡 道代
	大山 春奈	小川 豊	奥村美枝子	小田 恵子	香川 理絵
	片岡 藤雄	金子 洋平	河津 幸雄	北村 美和	小谷由紀子
	櫻井美智子	芝原 慶子	清水 香織	泉水 聖子	曾和由美子
	谷口由香里	中西予芝子	西村江美子	畠本 陽子	馬淵 敦子
	広津 勝幸	兵恵 志保	深草 清司	松本 里美	三浦 典江
	森田由紀子	山下 高弘	山本明日香	山元あゆみ	横江 絵理
	吉川 雅彦	脇 優加			
整 理 員	上原 久恵	大橋 有希	大八木真奈美	奥村 千絵	神代 園子
	小林 恵	畠 美由紀	野田 美香	宮嶋八重美	
7. 遺構・遺物写真は各調査担当が撮影した。
8. 本書の編集は、公益財団法人栗東市スポーツ協会文化財調査課が行い、実務を佐伯英樹・遠藤あゆむが担当した。埋蔵文化財調査報告の執筆は、各調査担当が行った。

目 次

卷頭カラー図版

例 言

目 次

2021（令和3）年度埋蔵文化財事業報告	1
----------------------	---

2021（令和3）年度埋蔵文化財調査報告

2021（令和3）年度 調査事業一覧	5
--------------------	---

2021（令和3）年度 調査遺跡位置図	6
---------------------	---

埋蔵文化財調査概要報告

①高野遺跡	調査管理番号2020R092-01	7
②靈仙寺・縊遺跡	調査管理番号2020R033-01	11
③下鈎東遺跡	調査管理番号2020R097-02	19
④手原遺跡	調査管理番号2020R025-01	23
⑤小柿遺跡	調査管理番号2020R100-02	25
⑥上鈎遺跡	調査管理番号2020R089-01	27
⑦小柿遺跡	調査管理番号2020R100-03	29
⑧下鈎遺跡	調査管理番号2020R095-01	33
⑨下鈎遺跡	調査管理番号2021R095-01	35
⑩高野遺跡	調査管理番号2021R092-01	37
⑪辻(出庭)遺跡	調査管理番号2021R003-01	39
2021（令和3）年度	市内遺跡範囲確認調査	44

2021（令和3）年度 埋蔵文化財事業報告

I. 調査事業（調査主体：栗東市教育委員会）

栗東市が実施する公共事業及び栗東市内における民間開発等に伴う発掘調査11件を実施した。栗東市内における神社、石仏関連などの文化財総合調査を1件実施した。

1) 発掘調査受託事業：11件

II. 公表事業（栗東市教育委員会・公益財団法人栗東市スポーツ協会）

市民の皆さんへ地域の歴史・文化財について理解をいただくため、実施した発掘調査の報告などを公開した。

【発掘調査年報の発刊】全国の自治体、学校、図書館、博物館などに成果を発信する。

「栗東市埋蔵文化財調査報告2021年度 年報」 出版部数：800部

【主要発掘調査成果のパンフレット印刷】無料で提供

パンフレット「はっくつ2021」 出版部数：2,000部

【学術誌への調査成果掲載】

〔木簡研究〕靈仙寺・縊遺跡出土木簡の紹介

「2020年出土の木簡 灵仙寺・縊遺跡（第一次）」2021年11月刊行43号に掲載

〔各発掘調査報告書〕

『栗東市文化財調査報告書第171冊 高野遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第173冊 灵仙寺・縊遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第176冊 下鈎東遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第178冊 手原遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第179冊 下鈎東遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第180冊 上鈎遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第181冊 小柿遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第182冊 下鈎遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第183冊 下鈎遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第185冊 高野遺跡発掘調査報告書』

『栗東市文化財調査報告書第186冊 出庭遺跡発掘調査報告書』

〔市民への情報提供〕

- ・市民の皆さんへ地域の歴史・文化財について理解をいただくため、広報、ホームページなどで、実施した発掘調査のその後の報告などを公開する。

【りっとう再発見】広報りっとうによる発掘調査関連記事の掲載

- ・「水辺の祭祀場～小柿遺跡～」4月号 4月1日発行
- ・「栗東とウマ」6月号 6月1日発行
- ・「平安時代の井戸を発掘～靈仙寺・縊遺跡～」8月号 8月1日発行
- ・「金属加工の先進地～辻遺跡～」12月号 12月1日発行

III. 普及啓発事業

【勾玉作り、遺跡の講座など】市民の生涯学習の一環として、歴史勉強会や市内の子どもたちに考古学体験を実施した。

- ・「治田西小学校 6 学年社会科歴史学習」 4月27日 参加人数：81名
内容：歴史講義 場所：治田西小学校
- ・「葉山東小学校 6 学年社会科歴史学習」 6月14日 参加人数：75名
内容：歴史講義 場所：葉山東小学校
- ・「子ども考古学体験クラブ」 8月21日、22日 参加人数：18名
内容：勾玉づくり 場所：出土文化財センター



【遺物展示等】地域の歴史や文化財について、出土した資料や成果の公開を通じて、市民の皆さんへ文化財保護に理解をいただける機会を提供した。出土した遺物や遺構の展示を栗東歴史民俗博物館と協力し開催した。

- ・小地域展「小平井の歴史と文化」
期間：令和4年3月12日(土)～5月8日(日)
会場：栗東歴史民俗博物館
内容：小平井の歴史資料を展示

【その他の啓発事業】歴史、文化財をより親しみ関心をもっていただくため、スポーツ振興事業と共同で歩こう会を開催し、文化財や遺跡を巡り、健康増進を兼ねて歴史を学んでいただく機会を提供した。

- 第21回春の歩こう会「安土歴史探訪ウォーキング」

期　　日：6月12日　　参加人数：41名

担当職員：近藤 広・末次由紀恵



IV. 栗東市出土文化財センター及び和田古墳公園の管理運営協力

- 栗東市が収蔵管理する埋蔵文化財資料の管理業務への協力

- 和田古墳公園の美観維持作業への協力

6月25日実施　　除草作業

6月29日実施　　除草作業

8月18日実施　　除草作業

11月11日実施　　除草作業

埋蔵文化財調査概要報告

調査事業一覧表

No.	遺跡名 調査管理番号	報告書 番号	調査面積 (m ²)	調査原因	時代	遺構	遺物	頁	担当
1	高野 2020R092-01	171	1710	工場建設	古墳、平安、 近世以降	堅穴建物、 掘立柱建物、 溝、耕作痕、 土坑	土師器、須恵器、 灰釉陶器、緑釉陶器、 黒色土器、陶磁器、 土鍤	7	近藤
2	靈仙寺・繩 2020R033-01	173	9111	宅地建設	弥生、奈良、 平安、鎌倉	堅穴建物、 掘立柱建物、 井戸、土坑、 水田他	石鏸、石斧、弥生土器、 須恵器、墨書き土器、 転用硯、土師器、 灰釉陶器、緑釉陶器、 管玉、刀子、釘、 曲物、井戸枠、木簡、 斎串	11	佐伯
3	下鈎東 2020R097-02	176	1211	倉庫建設	弥生、古墳、 飛鳥、平安	堅穴建物、 掘立柱建物、 土坑、溝	弥生土器、土師器、 須恵器、黒色土器、 玉製品、白磁	19	遠藤
4	手原 2020R025-01	178	206	倉庫建設	奈良、 近世以降	掘立柱建物、 溝、耕作痕	土師器、須恵器、瓦	23	近藤
5	小柿 2020R100-02	179	477	宅地建設	古墳、奈良、 平安、鎌倉、 江戸以降	古墳、河川、 土坑、溝	弥生土器、土師器、 須恵器、ガラス玉、 石鏸、砥石	25	近藤
6	上鈎 2020R089-01	180	195	共同住宅 建設	弥生、鎌倉	土坑、溝、柱穴	弥生土器、黒色土器	27	遠藤
7	小柿 2020R100-03	181	393	宅地建設	古墳、飛鳥、 奈良、平安、 鎌倉、 近世以降	河川、 掘立柱建物、 井戸	弥生土器、土師器、 須恵器、埴輪、石鏸、 石斧、木製品	29	近藤
8	下鈎 2020R095-01	182	308	宅地建設	弥生、古墳	河川、溝、柱痕	土師器、須恵器、石製品	33	遠藤
9	下鈎 2021R095-01	183	591	宅地建設	弥生、古墳、 鎌倉	溝、柱痕、河川	弥生土器、土師器、 黒色土器、銅製品	35	遠藤
10	高野 2021R092-01	185	181	共同住宅 建設	飛鳥、奈良、 平安、 近世以降	掘立柱建物、 柱列・柵、溝	土師器、須恵器、 鉄製品、砥石	37	近藤
11	辻(出庭) 2021R003-01	186	208	倉庫建設	古墳、平安、 近世以降	堅穴建物、溝、 柱痕	須恵器、土師器、 鉄製品、玉類、砥石	39	遠藤



2021年度(令和3)年度 調査位置図 (1 : 30,000)

①高野遺跡

調査管理番号
2020R092-01

栗東市文化財調査報告書第171冊

調査地 栗東市高野234番地

調査期間 2020年4月27日～2021年4月16日

調査面積 約1,710m²



調査地位置図

はじめに

高野遺跡は、野洲川をはじめとする大小河川によって形成された沖積平野の扇状地に区分され、そのうちの自然堤防状微高地に立地している。標高は、おおむね106.3～106.5m前後である。野洲川流域における古墳時代前期を代表する集落として知られ、現在までに堅穴建物が80棟以上確認されている。注目される遺物では、堅穴建物から出土した小型仿製鏡や鍛冶関連遺物と推定される鉄器片が多数出土している。今回の調査区は、高野遺跡の北西部にあたる大橋地区である。

遺構・遺物

調査はA、B、C、D、Eの4つに分割して行った。北側にあたるA、B区とC区の北半分およびD区の西側は工場の攪乱による影響が著しいが、攪乱を受けていない地山部分にピットや耕作痕らしき遺構がところどころに認められた。今回確認された遺構のほとんどが、C区南半部からE区にあたる地区に集中している。

I期とした古墳時代前期の遺構は、堅穴建物、柱列、埋納ピット等がある。堅穴建物は5棟（SI15、SI120、SI130、S

I200、SI201）確認されている。平面形は全て方形で、大きさ4～5mである。残存状況が良好であるSI130は、周囲に壁溝をめぐらせ、4本主柱穴、南辺中央に土坑をもち、中央には炭化物、焼土の集中する部分がみられ炉が存在していたと思われる。また同じく土坑が存在していたSI120では、下層に大きさ10cm前後の礫が詰められ、土坑の東脇に砂礫敷きの土堤がみられた。時期は、出土した土器（庄内新段階から布留式古段階併行）からおおむね3～4世紀の堅穴建物と判断される。堅穴建物以外では甕を埋納したピットP50や柱列SA-D3、SA-D4などが確認されている。

II期（平安時代）では、掘立柱建物SB-C1、埋納ピットP68などが確認されている。SB-C1は桁行東西4間から5間（10～13.0m）、梁行南北4間（10m）の掘立柱建物で、主軸はおおむね正南北方向を意識している。南側の端は拡張した痕跡がみられる。P68は、長径90cm、短径70cm、深さ25cm前後のピットで、土師器の杯1個と土師皿2枚が重なって出土している。

III期（近世以降）では、おそらく農業関連に係る溝（SD16、SD17）や土坑（SK75、SK128）、耕作痕などが確認されている。

出土した遺物は、古墳時代前期から平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、中国陶磁、土錘などのほか、近世以降の陶磁器類が出土している。また土器類以外では、炉壁や鉄滓が出土している。炉壁については、明治時代（18世紀後半から19世紀）のものと推定され、鉄滓については平安時代11世紀以降のものと推定される。

今回確認された炉壁もそうであるが、近世以降の鋳物関連の遺物が辻遺跡以外から出土することがあり、今後、鋳物師関連遺跡のひろがりについても検討していく必要がある。

（近藤）



C区、D区全景（写真上が西北）



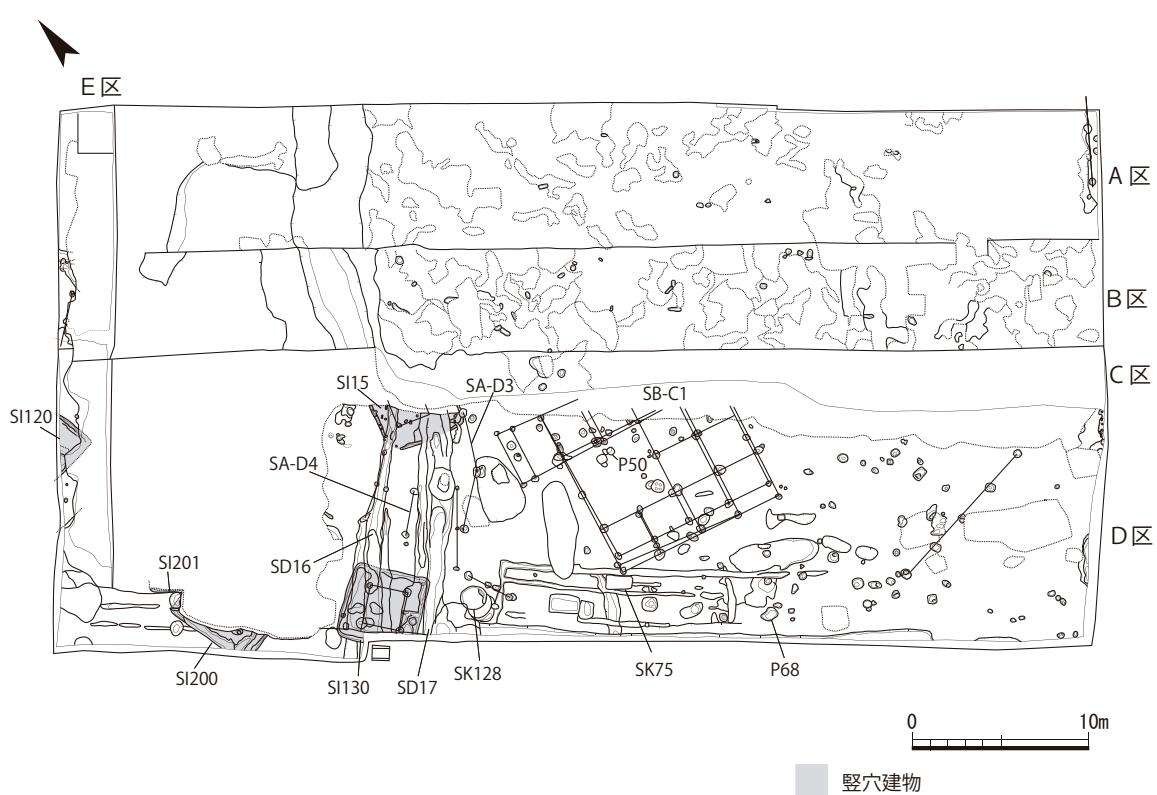
S B - C 1 ほか（東南から）



S D 1 7 遺物出土状況



埋納ピット P 6 8



調査地遺構図



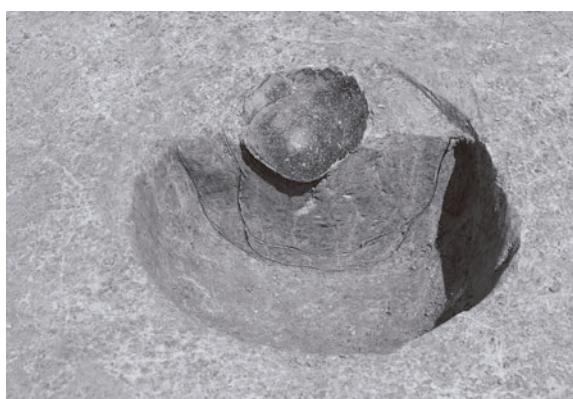
S1130、S1200、S1201 (東南から)



S1200・S1201 (南から)



S1120 (西北から)



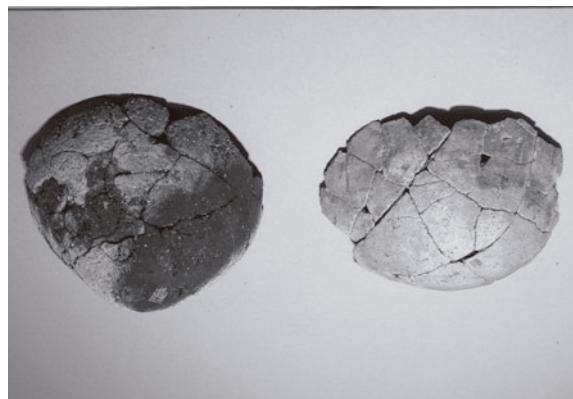
埋納ピット P50 断面



S1130 (南東から)



S I 1 3 0 受口状口縁甕



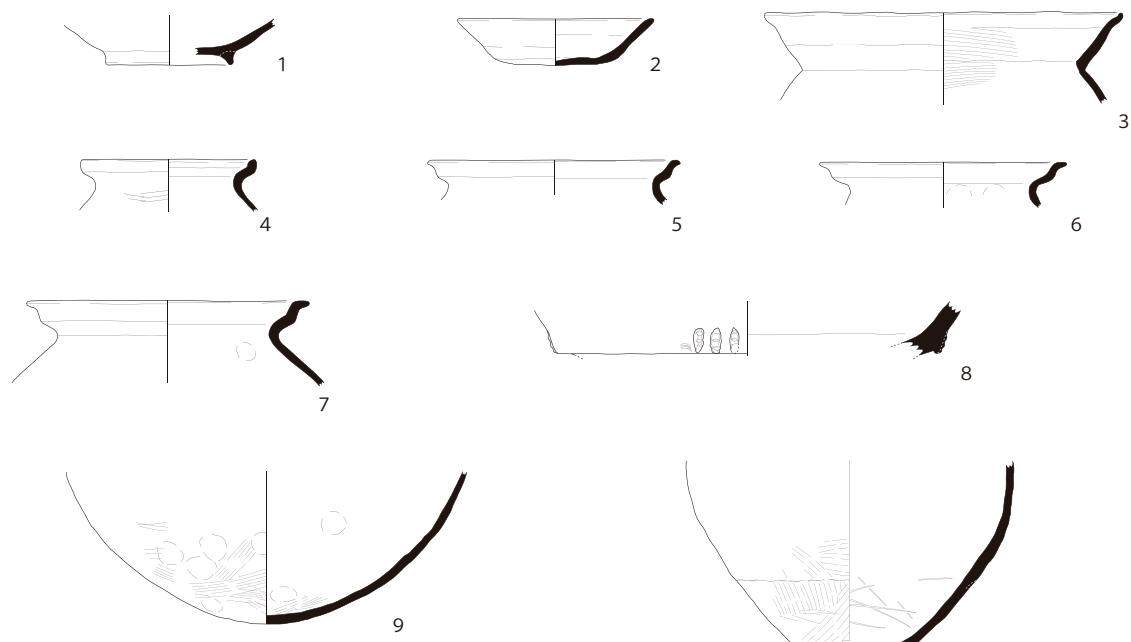
S I 1 3 0 · 埋納 P 5 0 甕底部



D区土錘



S D 1 7 炉壁



S B 1 P (1~3)

S I 1 3 0 (4~9)

P 5 0 (10)

0 10cm

出土遺物実測図

② 灵仙寺・縄遺跡 調査管理番号 2020R033-01

調査管理番号
2020R033-01

栗東市文化財調査報告書第173冊

調査地 栗東市北中小路181番11 他60筆
調査期間 2020年6月15日～2022年3月31日
調査面積 9,111m²

はじめに

調査地は、靈仙寺遺跡の北東端部と総遺跡の西端部にまたがった位置に所在する。栗東市域の中では琵琶湖に近い沖積平野にあり、主として野洲川が形成した扇状地性低地に立地し、標高は約93mである。

靈仙寺遺跡は、縄文時代中期から近世にいたる遺跡で、縄文時代中期には沼沢地や土坑群が検出されている。縄文時代晩期から弥生時代前期には沼沢地から木製農耕具が出土し、半湿田型の土壤で農耕が始まっている。飛鳥時代では大字小平井地区で正南北方位の溝や掘立柱建物が確認され、多量の瓦とともに、円面硯や無文銀錢などが出土したことから白鳳寺院の存在が確実視され、「小平井廃寺」と仮称されている。

縊遺跡は、弥生時代から近世にかけての遺跡で、遺跡内を中山道が通過し大宝神社が鎮

座する。弥生時代後期には一辺9mから20mの方形周溝墓群が確認されており、陸橋を持つものが多くみられる。中世集落は15世紀になると幅5m、総延長230mに及ぶ濠を備える環濠集落が形成されている。

調査区北方の守山市下長遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代前期の拠点集落があり、首長居館や祭殿が確認され、旧河道からは準構造船や儀仗、銅鐸飾耳、小型の銅鏡など豊富な遺物が出土している。

遺構・遺物

今回の調査では、弥生時代後期から鎌倉時代までの様々な遺構・遺物が出土した。

弥生時代では後期の竪穴建物 S I 806（一辺約 8 m）を T 4 の北西端で検出した他、複数の円形土坑や井戸を検出した。土坑や井戸からは比較的多量の弥生土器が出土しており、周辺に集落の広がりが想定される。竪穴建物は、検出面で壁溝・屋内土坑・主柱穴を確認しており、弥生時代の生活面が数十センチにわたり削平されていることが分かる。また、竪穴建物 S I 806 から出土した赤色の鉱物状の塊は、分析の結果鉄分を多く含むことが判明した。竪穴建物の床面 5ヶ所に赤色



面があるので、赤色顔料のベンガラを製作した工房であったと考えられる。

古墳時代前期ではT 1 1で井戸（井戸S E 2277）を1基確認した。平面形状は楕円形で長辺2.6m、短辺2m、深さ1.44m。古墳時代前期（庄内式併行期）の古式土師器が下層からまとめて出土した。

続く飛鳥時代では、出土遺物はみられるが、明確な遺構は検出されなかった。

奈良時代では、正南北方位を採る2棟の掘立柱建物と井戸を検出した。井戸S E 877は、T 6東端で検出した。直径2.6m、深さ1.55m、井戸枠などは残存しなかった。墨書き土器が3点出土、いずれも須恵器杯身で、2点は「廣津」^{ヒロキツ}と判読でき、1点の文字は不明。廣津氏は物部系の渡来氏族であり、当地は近江国栗太郡物部郷^{もののべ}にあたり、この地に居住した氏族を考えるうえで貴重な資料である。

平安時代では、9～10世紀代と考えられる掘立柱建物6棟と井戸1基を検出した。掘立柱建物のうち2棟は高床倉庫で、2間×2間と3間×3間で、後者は床面積25m²。井戸（T 4・S E 614）は一辺1.6m、深さ1.6mで、井戸の底には方形に組まれた井戸枠とその内部に曲物が残存していた。曲物内部から黒色土器椀のほか、木簡1点と水靈祭祀の祭具である斎串が4点出土した。木簡は長さ27.6cm、幅4.6cm、厚さ0.4cmの短冊型（011型式）で、表面は2行で14文字以上が確認できる。裏面は右行に13文字と左行に削り残しの文字が多数確認できるが判読は困難である。斎串は長さ14cm～11.4cm、幅2.5cm～1.65cm、厚さ0.25cm～0.15cm。形態は上端を圭頭状にして下端を剣先状に作るC型式で、切込みは上端近くの側面左右に2ヶ所以上入れるIV式である。

平安時代末から鎌倉時代初めの12世紀後半から13世紀前半では、掘立柱建物14棟以上、井戸10基、土坑、区画溝を検出した。掘立柱建物は1間×3間、2間×3間、2間×4間、

3間×4間など小・中規模のものと、5間×5間で、一辺10.8m、床面積120m²の比較的大規模な建物がある。区画溝は3条確認した。幅2.2m～2.8m、深さ0.6mで最長50mにわたり検出した。また、11世紀以前の水田を検出し、畦畔周辺の15m×8m（120m²）の範囲から足跡とみられる窪みを約400ヶ所検出した。

平安時代末から鎌倉時代始めには、区画溝に囲まれた集落が発達し、掘立柱建物を建替えながら生活を営んでいた様子がうかがえる。

14世紀には北中小路の現集落や、東山道沿いへ集落は移り、この付近が水田化していくことが耕作痕の存在からうかがえる。

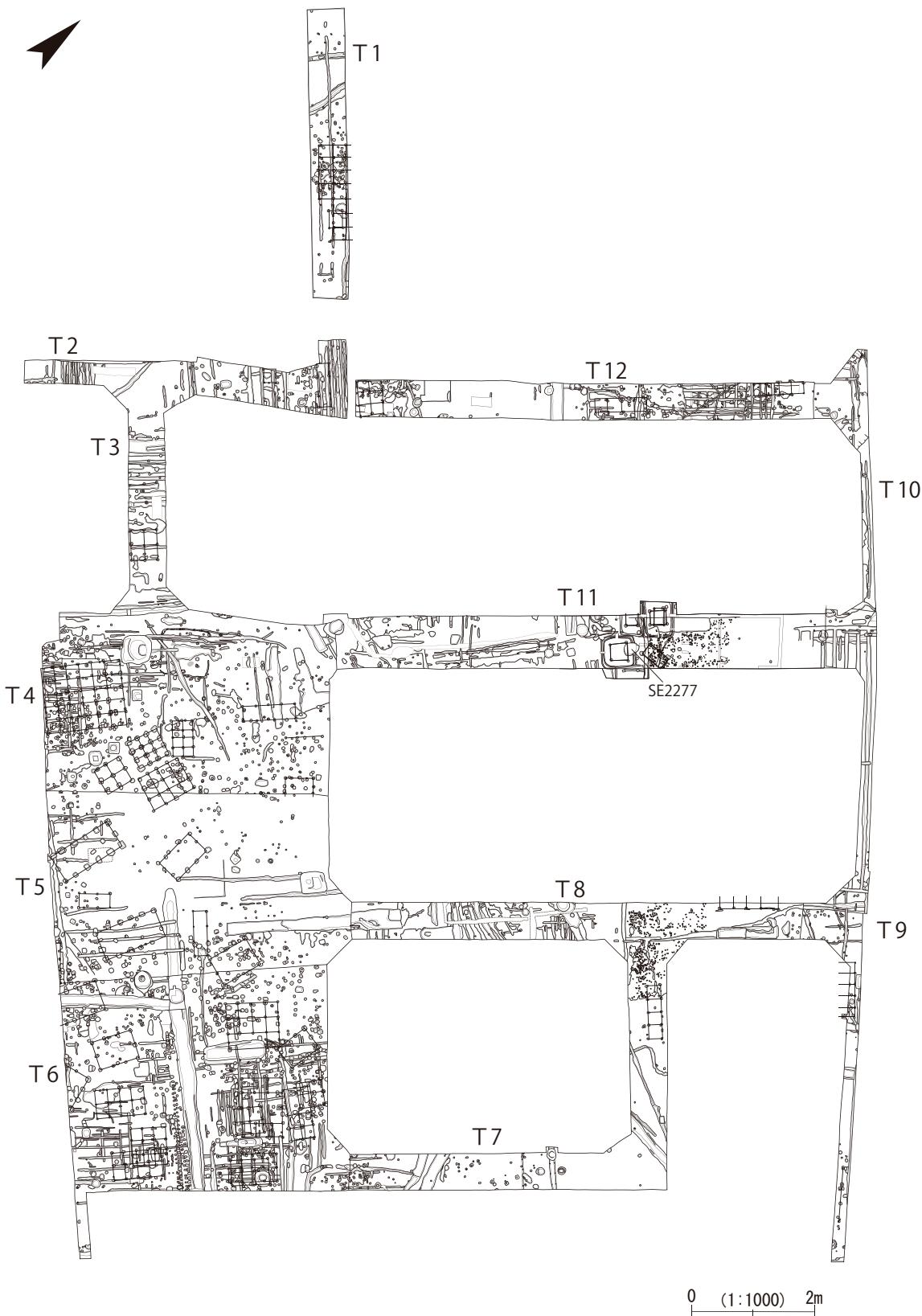
区画溝をもつ集落の北側では、11世紀以前に水田が営まれていたが、12世紀後半には居住地となっている。

以上、広範囲の調査により、この地域の歴史的様相の一部が明らかになった。

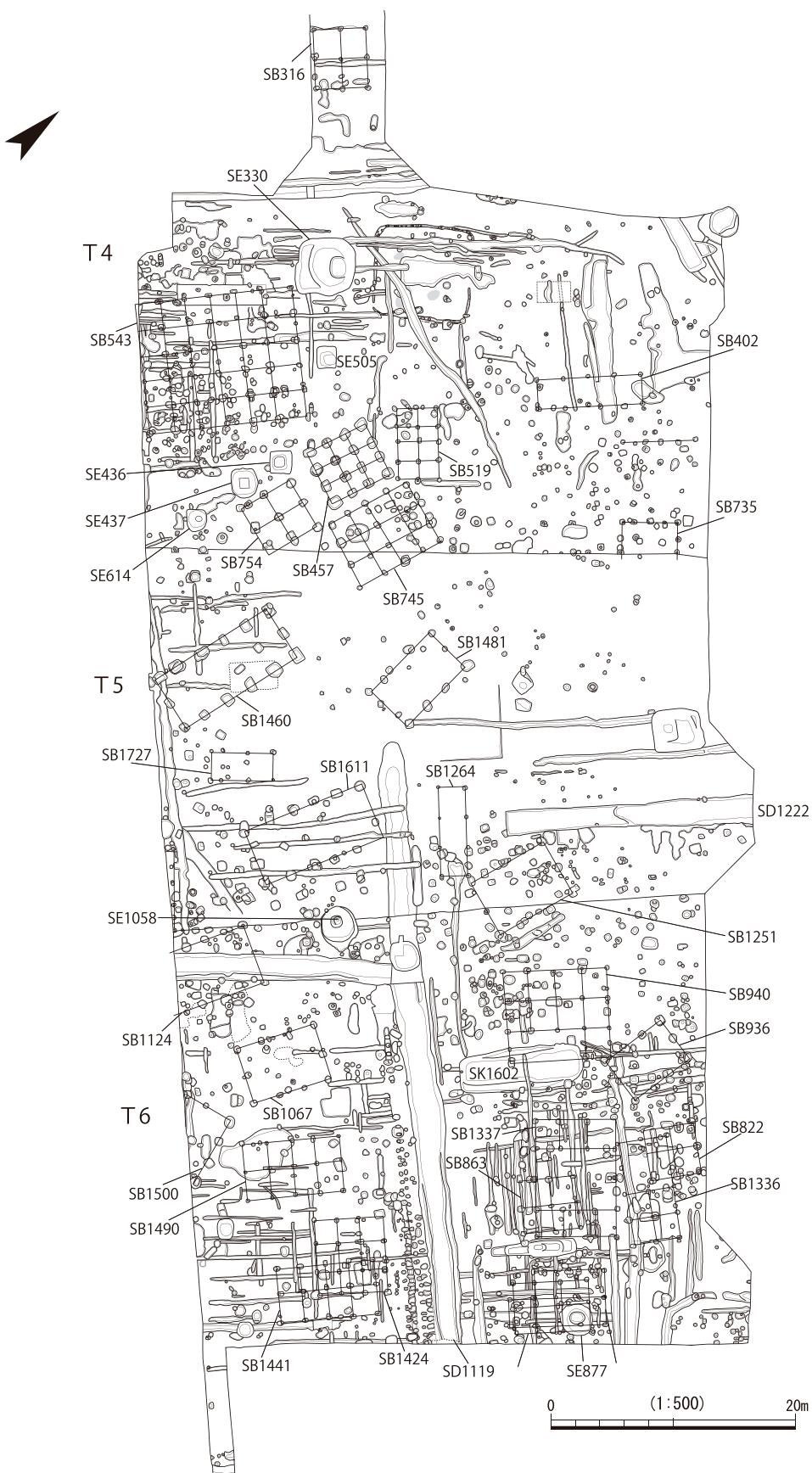
（佐伯）



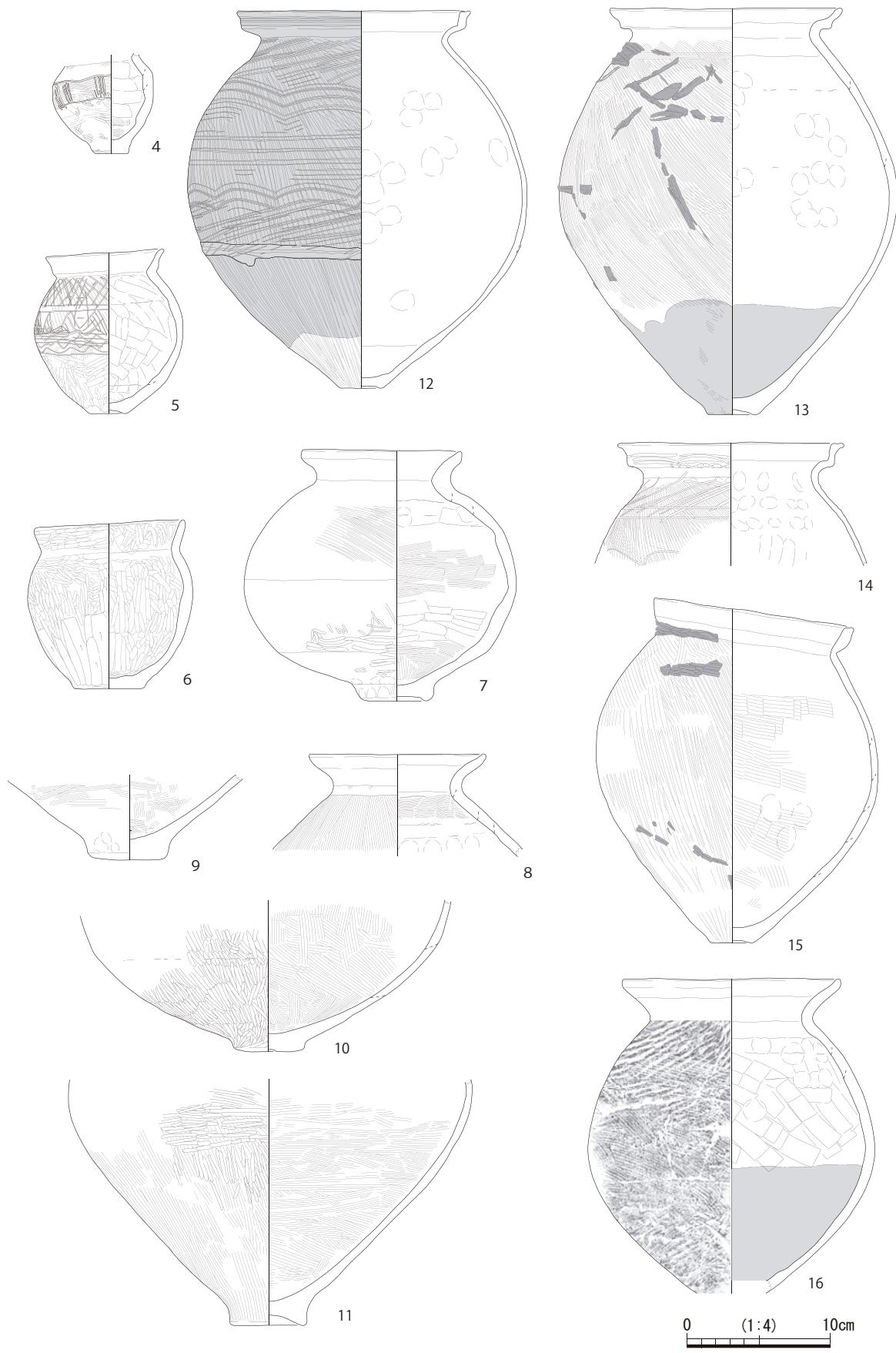
表 裏
T 4 S E 614 出土木簡



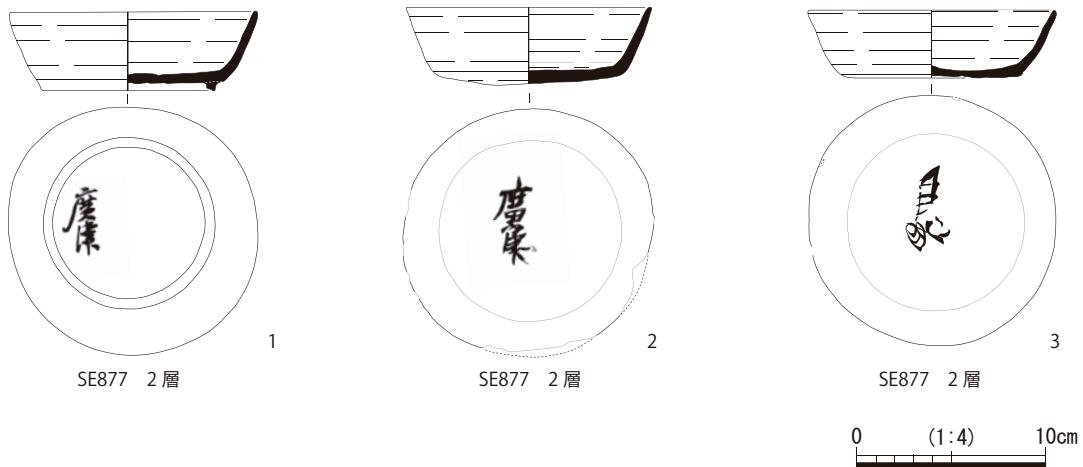
遺構全体図



T 4・T 5・T 6 遺構平面図



T 11 S E 2277 出土遺物実測図



T6 SE877出土遺物実測図



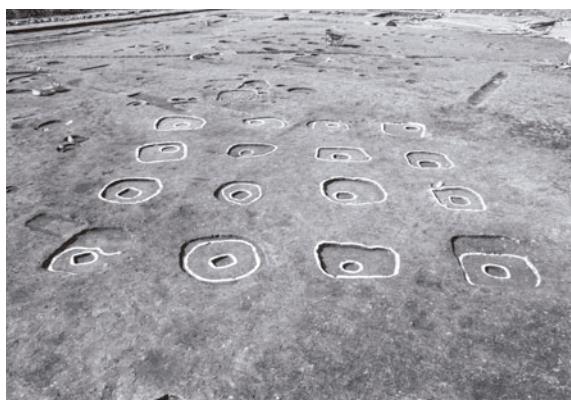
T6 SE877出土 墨書き土器「廣津」



T 5 · T 6 完掘状况



T 4 S E 6 1 4 木簡出土井戸



T 4 S B 4 5 7 高床倉庫



T 4 S E 4 3 7 井戸断割状況



T 4 S I 8 0 6 竪穴建物完掘状況



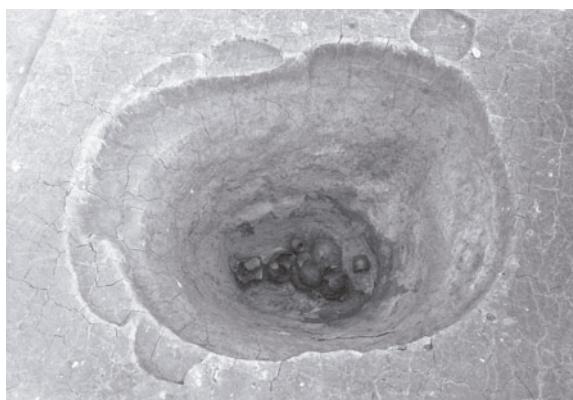
T 5 中世区画溝



T 7・T 9 水田跡



T 6 S E 877 墨書き土器出土井戸



T 11 S E 2277



T 11 S E 2277 土器出土状況

③ 下鈎東遺跡

調査管理番号
2020R097-02

栗東市文化財調査報告書第176冊

調査地 栗東市上鈎45番、47番
調査期間 2020年7月27日～2021年1月28日
調査面積 1,211.76m²



位置と環境

下鈎東遺跡は、野洲川が形成した扇状地上に位置し、標高は約103mから106mである。遺構は弥生時代後期のものが多く残存しており、2005年の区画整理事業に伴う発掘調査では多数の竪穴建物の他、市内では初の五角形竪穴建物を検出している。2009年の調査では、寺院の基壇とみられる遺構と基壇を囲う柱列、飛鳥時代の瓦が大量投棄された土坑がみつかり、総数コンテナ200箱分の古代瓦が出土した。2017年度の調査では、飛鳥時代の遺物を多量に包含する溝、平安・鎌倉時代の掘立柱建物、井戸が検出された。掘立柱建物は条里方向に沿うように建てられ、何度も建て替えが行われている痕跡がみられた。

今回の調査区は2005年の調査と2017年の調査の近接地となるため、両調査との関連が注目される。

遺構・遺物

調査区内では、6棟の竪穴建物と、3棟の掘立柱建物、飛鳥時代の遺物を包含する溝を検出した。

S I 1 1 3 5 調査区から最も北側で検出された竪穴建物で、一辺約6mを測る。4つの柱穴、貯蔵穴1つを持つ。床面に焼土は検出できなかったが、壁溝があり、南東辺の一部床面に細かい砂利がみられた。出土遺物から弥生時代後半から古墳時代前半とみられる。

S I 1 1 3 6 S I 1 3 5 を切る形で検出された。一辺約3mで壁溝がみられる。一部に細かい砂利が混じる。遺物から弥生時代後半から古墳時代前半とみられる。

S X 1 1 4 1 プランは半面不明であるものの、埋土や遺物から、削平によって欠損した竪穴建物の残骸とみられる。残存幅は約5mで、古墳時代前半のものとみられる。

S I 2 0 2 0 一辺約6.5mで、細かい砂利が床面全体に混入し、一部焼土も検出された。貯蔵穴を1つ持つ。土器を多量に包含し、管玉が1点出土した。遺物から弥生時代後半から古墳時代前半とみられる。

S I 2 0 3 0 一辺約8.5mの大型竪穴建物で、飛鳥時代の流路に中央を切られる形で検出した。床面より円の中心を同じくする2重の壁溝を検出したことから、直径約5mの竪穴建物が建てられ、その後拡張する形で直径約8.5mの竪穴建物に建て替えたとみられる。不明瞭であるが、やや丸みを帯びた多角形のプランを持つことから、多角形建物とみられる。竪穴建物の埋土からは弥生時代後半から古墳時代前半の土器が出土した。

S I 3 0 2 6 一辺約7mで、プランがやや不定形であるものの、4つの柱穴と南方に貯蔵穴を持つ。削平によって上部が削り取られている。弥生時代後半から古墳時代前半の土器が一括で廃棄された痕跡がある。

S B 1 0 0 7 調査区北西端で検出した。調査範囲内では桁行1間のピットしか検出できなかったが、両柱穴埋土中から出土した白磁碗の破片が接合関係にあることから、同時期の柱痕であるとみられ、調査区より更に北西方向に広がる建物であったと考えられる。遺

物から鎌倉時代の建物とみられる。

S B 1 0 0 8 1区と2区の境界部分より検出した。桁行3間、梁間2間が確認される。遺物の包含が少ないものの、鎌倉時代の建物とみられる。

S B 2 0 0 3 桁行3間（約7.0m）、梁行3間（約8.4m）が確認される。床面積は約58.8m²である。中央梁間が広く（約4.3m）とられている。柱痕から土師器皿と黒色土器の破片が数点出土している。鎌倉時代とみられる。

S B 2 0 4 2 桁行3間（約7.0m）、梁行2間が確認される。南側梁間の間隔が広い。建物の方向軸が揃っていることから、SB 2 0 0 3と同じく中央の梁間が広くとられる建物であると考えられる。柱痕の遺物から鎌倉時代の建物とみられる。

まとめ

遺構、遺物の両面から今回の調査区内検出遺構は以下の3時期に分類される。

- ①弥生時代後半から古墳時代前半の竪穴建物群
- ②飛鳥時代の土器を包含する溝
- ③鎌倉時代以降の掘立柱建物等の遺構群

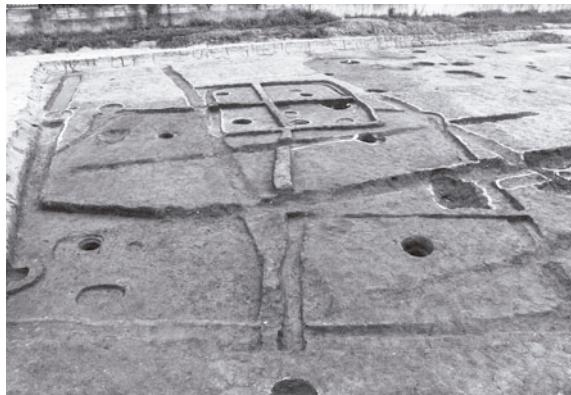
今回の調査で①の時期の中心になるのは直径約8.5mを測るS I 2 0 3 0である。前述の2016年の調査でも同様の拡張を伴う大型竪穴建物が検出されているほか、2005年の調査でも大型の五角形建物が検出されている。

②の時期の溝は、今回の調査区より北西約300mの地点で行われた2016年の調査でも検出されている。溝の方向はほぼ正南北方向を示し、正方位を指向するという点で共通することから、大規模な区画溝の可能性がある。

③鎌倉時代以降の掘立柱建物については、柱痕から出土した土師皿や白磁片から13世紀頃とみられる。3間程度の小・中規模の建物が確認された。

2016年に行われた野尻・下鈎遺跡の調査も類似する調査成果が得られており、一連の遺構の広がりを見ることができる。

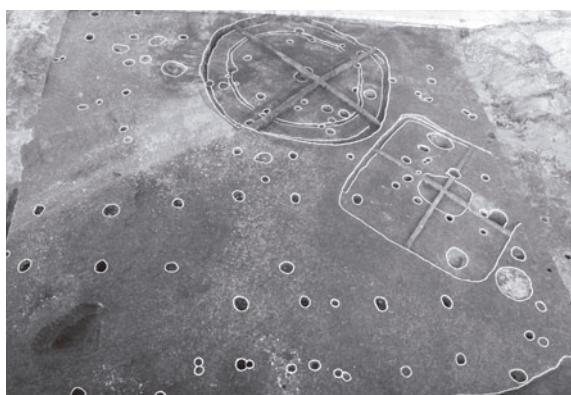
（遠藤）



S I 1 1 3 5 完掘状況



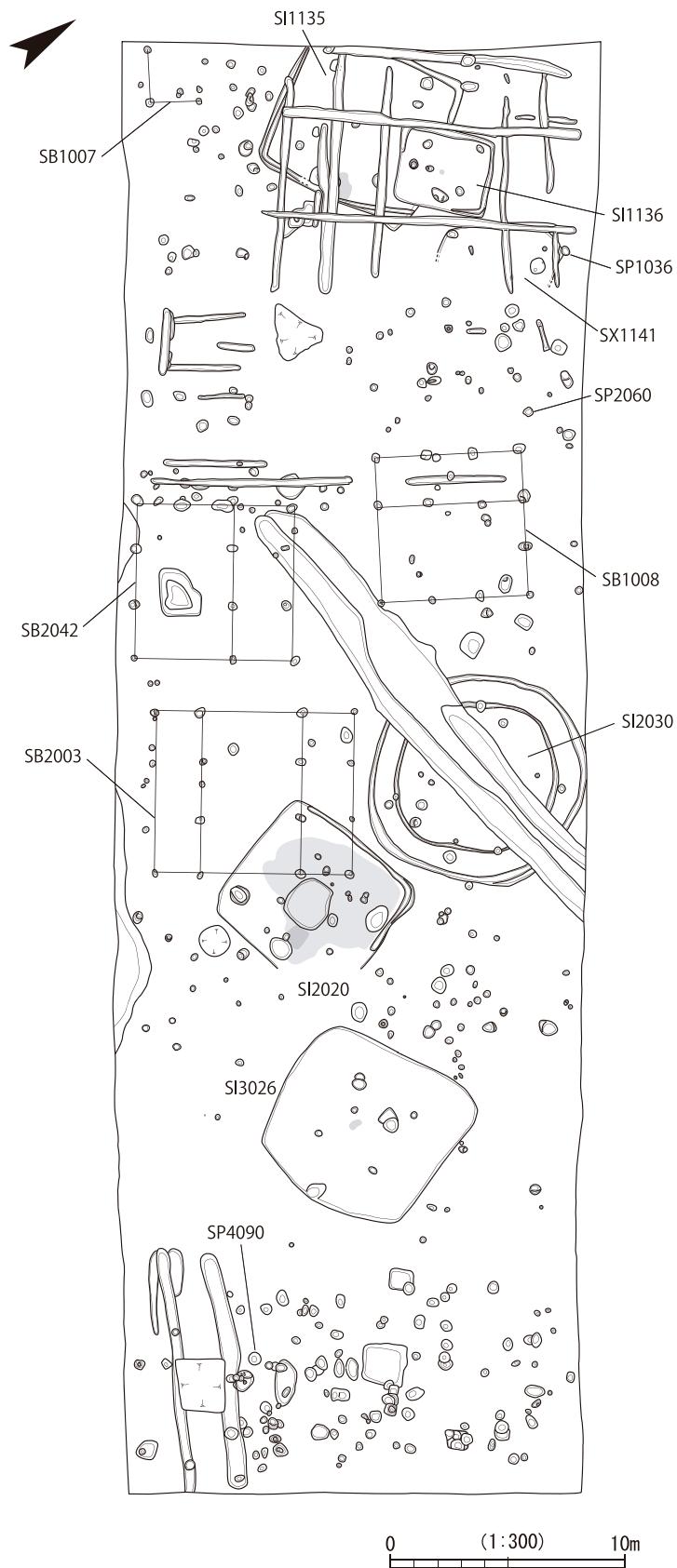
S 2 0 2 0 貼床検出状況



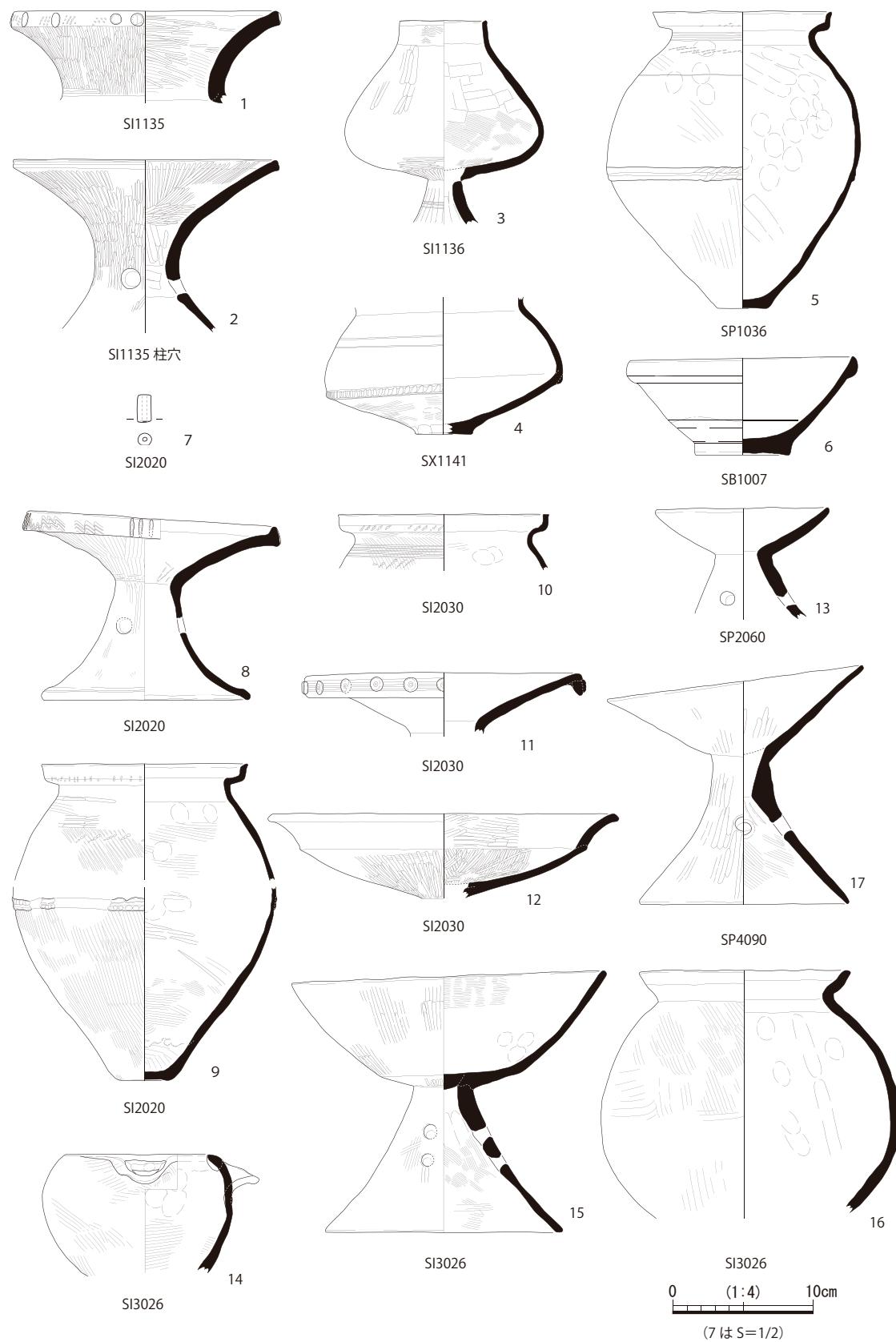
2区全景写真



S I 2 0 3 0 土器出土状況



遺構平面図



出土遺物実測図

④手原遺跡

調査管理番号
2020R025-01

栗東市文化財調査報告書第178冊

調査地 栗東市蜂屋虫喰903番1
調査期間 2020年8月19日～2021年4月23日
調査面積 206m²



調査地位置図

はじめに

手原遺跡は、滋賀県栗東市の北部中央に位置し、野洲川が形成した扇状地上(標高105m前後)に存在する。遺跡の南端には六地蔵の古琵琶湖層丘陵地に源を発する葉山川が流れ、遺跡の南側に近世東海道が東西に通っている。遺跡の範囲は、東西約700m、南北約400mの範囲で、古代の寺院、役所が存在していたと推定されている。

今回の調査区は手原遺跡の最西端で、蜂屋遺跡と接する場所にあたる。1986年度に行われた調査区すぐ東側の調査(蜂屋遺跡86R022-03)では、区画溝をもつ四面庇の掘立柱建物が確認され、曲物を転用した「□長等来」・「亦二祿」と書かれた木簡断片が出土している。

遺構・遺物

今回確認された遺構は、奈良時代と近世以降の2時期に分けられ、奈良時代の遺構は、重複関係から3時期に細分される。

奈良時代の遺構としては、掘立柱建物SB1、SB2、溝SD3、SD4、SD5、SD6で、SD8がSB1に先行するが土器の出土がないので詳細は不明である。

SB1は、東西2間(3.7m)、南北2間(3.4m)の総柱建物で、9本柱で構成されている。床面積は12.58m²である。SB2は、SB1同様東西2間(4.1m)、南北2間(3.2m)の総柱建物で、9本柱で構成されている。床面積は13.12m²である。いずれの建物も南北辺の南側と、東西辺の西側がやや長くなる。時期は8世紀代の所産と推定される。

溝は6条確認されている。そのうち北端に確認されている溝(SD3～SD7)については、集落を区切る溝と思われるが、当初東西方向を意識した直線的に延びる溝と推定していたが、掘削していく段階でSD3の東端が南側に屈曲していく感じがみられたので、長線的なものではなく地形に合わせて屈曲していた可能性がある。周囲で確認されている溝を確認すると直線的に延びる溝がないことから、自然の河川を利用して加工した溝であった可能性がある。

このほか、車輪の痕跡と推定される1.7mの間隔をもって2本が並行して延びる細い溝SXが存在する。重複関係は、SB1、SD8より新しく、SD3より古い。

耕作痕は、調査区南側に7条と、北側に1条存在する。主軸は、おおむね旧栗太郡主条里に沿って作られている。鍬溝と思われる耕作痕で、時期はおそらく近世以降であろう。

遺物は、土師器、須恵器、丸瓦の破片などが出土している。須恵器の時期は、おおむね8世紀前半から中頃の所産であろう。

まとめ

1986年度調査区で確認されている四面庇の掘立柱建物SB1および柵列SA1の主軸はおおむね南北方向であり、今回確認されている建物SB1、SB2とともに主軸が異なる。しかし、主軸が異なることから時期が異なる建物と判断するのは注意が必要であり、地形に沿った溝に合わせて建物の主軸をとる場合も少なくないので、今後周囲の状況を含めて総合的に判断していく必要がある。(近藤)



調査地全景（北東から）



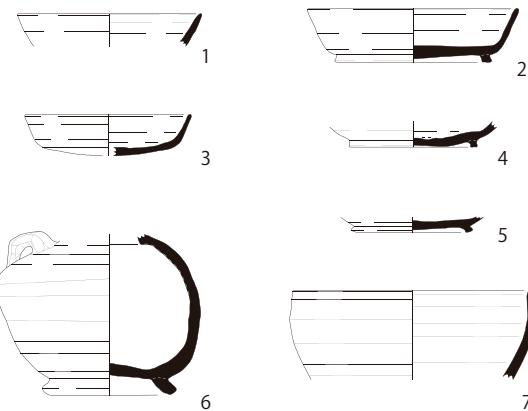
S B 1 (北西から)



S B 2、S X細溝 ほか（南から）



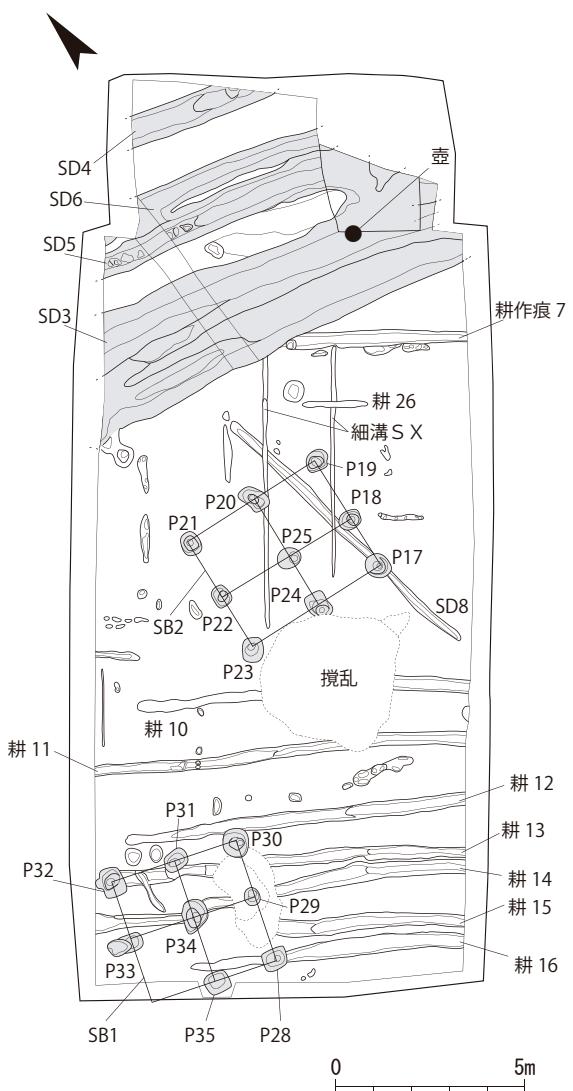
S D 0 3 須恵器壺出土状況



SD8(1)
SB2P(2)
SD3(3~7)



出土遺物実測図



調査地遺構図

⑤小柿遺跡

調査管理番号
2020R100-02

栗東市文化財調査報告書第179冊

調査地 栗東市小柿四丁目240番
調査期間 2021年1月8日～2021年9月24日
調査面積 約497m²



調査地位置図

はじめに

小柿遺跡は、滋賀県栗東市の北部に位置し、野洲川が形成した扇状地上（標高97m～98m前後）葉山川の左岸に位置している。

過去の調査から縄文時代中期から近世以降の複合遺跡であることが明らかになっており、今回の調査地周辺では主に弥生時代後期後半の竪穴建物や掘立柱建物が確認されている。

近年の調査（2017、2018年度調査）では、飛鳥時代から平安時代前半と推定される建物（倉庫ほか）がまとまって確認され、遺物では和同開珎や土馬が出土するなど官衙的要素がみられ注目されている。

遺構・遺物

今回確認された遺構は4時期に分けられる。I期（古墳時代前期～中期）では、方形に溝が巡る方墳と推定される遺構が8基（S Z 1～8）確認された。時期は、S Z 1が5世紀以降、それ以外は古墳時代前期（4世紀）の可能性が高い。大きさからは、8m弱と5.5～6m級の古墳に分けられ、これらの古墳が列状に並んでいた可能性がある。河川N R 13は、道路トレンチ2全体にひろがる河川で、幅約5～6.5m、深さ1.4m前後を測る。

下層から手づくね土器を含む多数の土器が出土しており、水辺の祭祀が行われていた可能性がある。時期は、下層から出土している土器の大半が古墳時代前期の所産であり、上層からは奈良時代前半の土器が出土していることから、おおむね4世紀前半から8世紀前半まで存続していたと推定される。

II期（飛鳥時代～奈良時代）では、土坑S K 6、溝S D 5、S D 11がある。

III期（平安時代～鎌倉時代）では、掘立柱建物S B 1、ピットP 21が存在する。S B 1は、現状で、桁行3間（5.8～6.3m）、梁行3間（9.3m）の建物である。奈良時代（8世紀）以降とされるS D 11が埋まってから建てられている。時期は、おおむね平安時代と推定される。

IV期の遺構として近世以降と推定される耕作痕などがある。

遺物は、河川N R 13から出土した古式土師器を中心に、飛鳥時代から奈良時代の須恵器や土師器がある。とくに注目されるのは下層から出土した手づくね土器で、底部の形態から丸底のもの、上げ底タイプのもの、平底のものに大別できる。時期は、条痕文系の壺が弥生時代前期である以外はおおむね古墳時代前期の3～4世紀前半の所産と推定される。土器以外では、S Z 2西側周溝B地点からガラス製丸玉が出土している。またS Z 3東側の周溝A地点からサヌカイト製の無茎石鏃が出土している。

まとめ

過去に報告されている小柿遺跡の古墳は、最大で一辺が17m、周溝幅3～4mの方墳で、次いで14mの方墳と続く。階層的には15m以上が集落内における中心となる人物の古墳ではないかと推定され、今回確認された8m弱と5.5～6m級の古墳はその下の階層にあたる人物の古墳ではないかと思われる。

（近藤）



調査地遠景（南東から）



N R 13出土手づくね土器



調査地遠景（北西から）



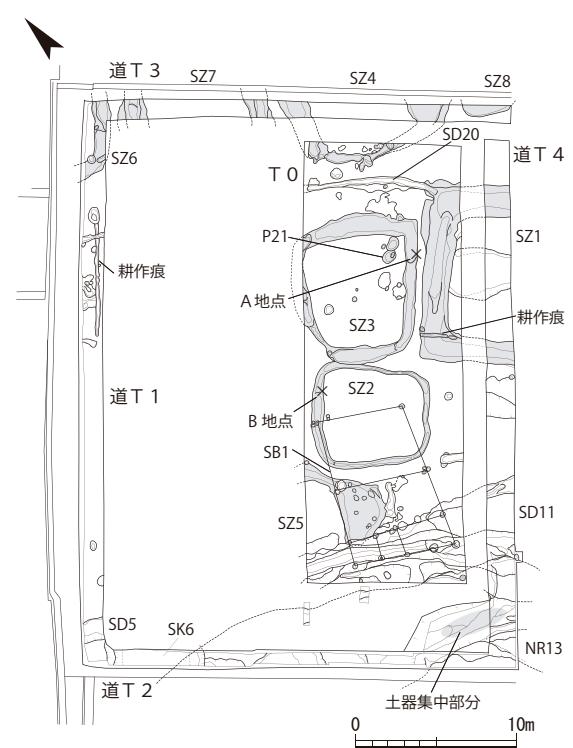
N R 13出土古式土師器



N R 13下層土器出土状況（北東から）



N R 13手づくね土器出土状況



調査地遺構図

⑥ 上鈎遺跡

調査管理番号
2020R089-01

栗東市文化財調査報告書第180冊

調査地 栗東市下鈎1530番・1542番
調査期間 2021年1月6日～2021年8月13日
調査面積 195m²



調査地位置図

位置と環境

上鈎遺跡は、栗東市の北西部に位置し、野洲川が形成した扇状地に立地している。近隣には葉山川が流れ、旧東海道が通過し、国道一号が横断するなど、歴史的にも交通の要衝である。

上鈎遺跡で現在確認されている最古の遺構は弥生時代後期で、土坑から脚付鉢が出土している。1982年の調査では、方位や条里方向とは異なる方位を示す溝が発見された。1995年の下鈎東遺跡でも延長線上に同方向の溝が検出され、これが足利健亮氏が推定する古代官道とほぼ一致していることから、関連する溝と考えられる。今回の調査区より東に150mの地点で行われた2017年度調査では、方形周溝墓、弥生時代後期の竪穴建物、飛鳥時代から中世にかけての掘立柱建物跡、井戸、条里方向を志向した溝などが検出されている。

基本層序

調査区内の基本層序は、層厚0.3mの耕土下に遺構検出面である黄褐色砂質土層に到達する。

主要検出遺構

S K 1は調査区南東部で検出した。上層には炭が混じる。1層下部に弥生時代後期の土器を大量に包含している。1層と2層出土の土器に目立った時期差はみられなかった。土器片の摩耗が少ないと、土器の出土状況から一括廃棄の土器と考えられる。

実測に耐えうる土器は、ほぼS K 1から出土しており、脚付を含む小型無頸鉢、受口状口縁甕、有孔鉢、広口壺、広口短頸壺が出土している。

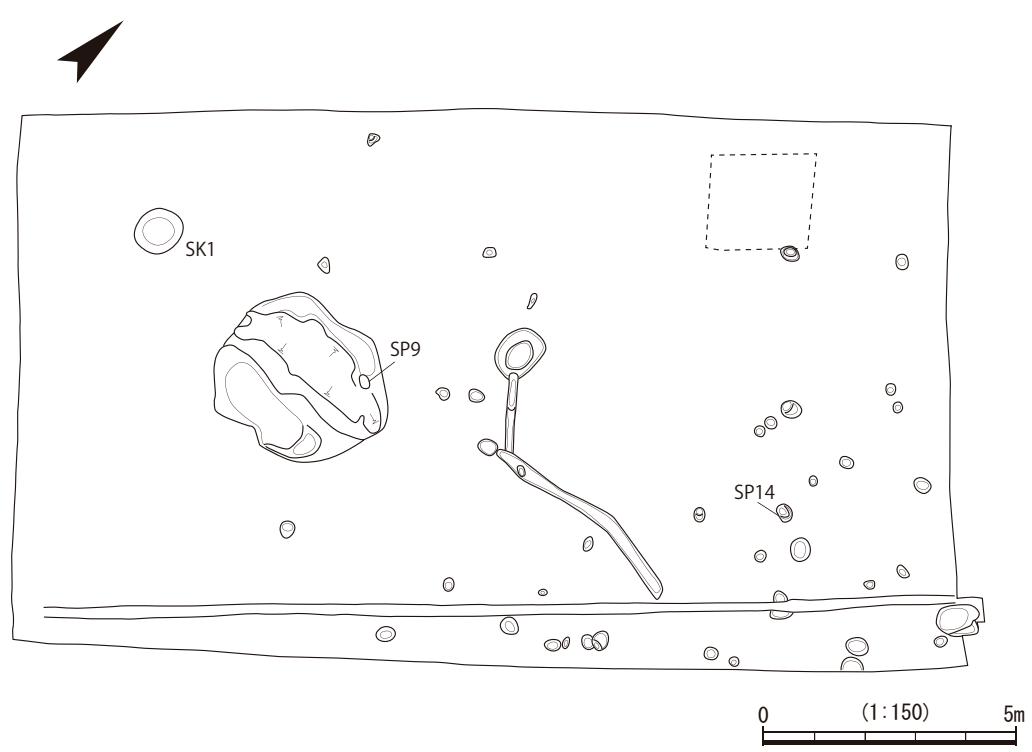
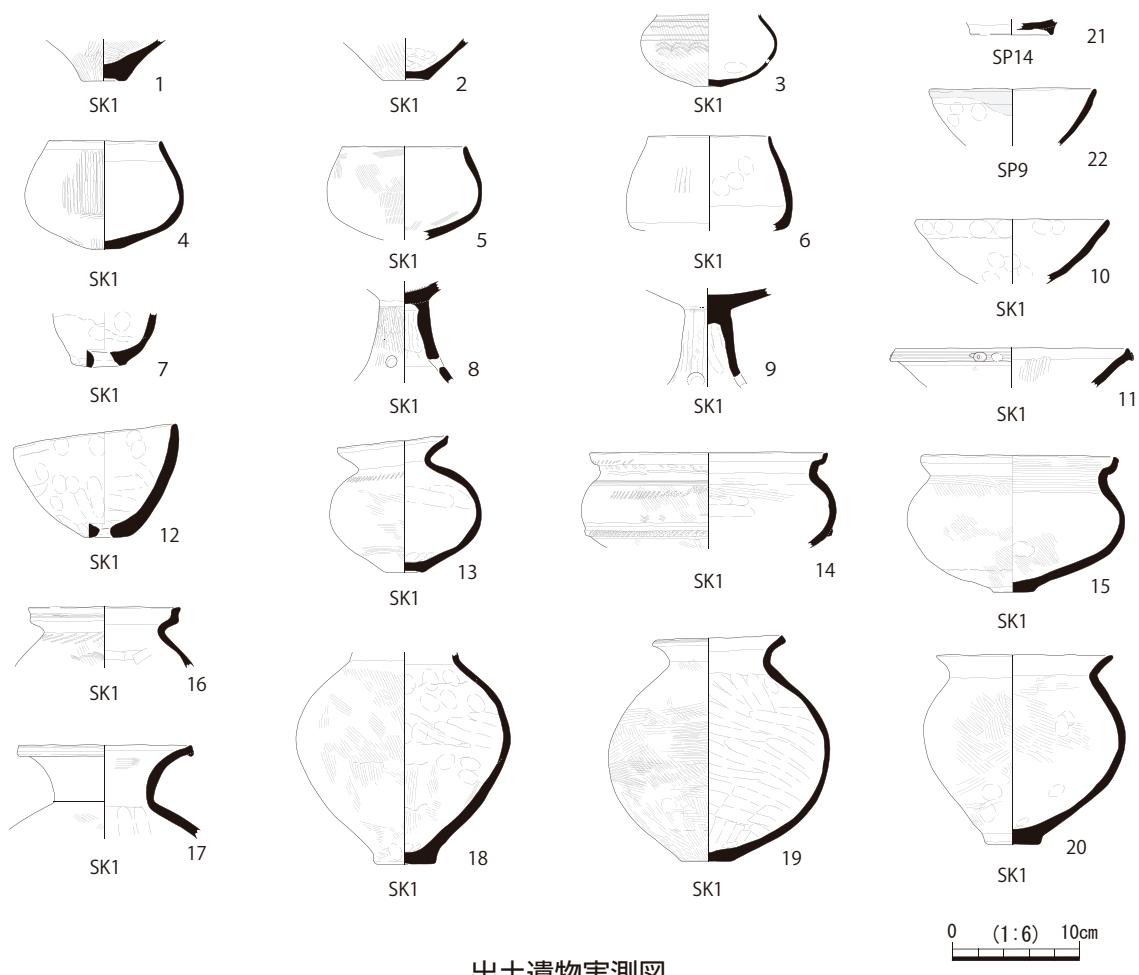
まとめ

今回の調査区内の遺構は、土器を多く包含した土坑がある弥生時代後期と、中世のピット、耕作痕の大きく2時期に分けられるが、遺構密度は非常に疎であった。弥生時代後期とみられる土坑内から大量の土器が出土したもの、調査区内から同時期の遺構が検出できず、遺構の性質を面的に捉えることが困難である。しかし、土坑内部の堆積から判断するに、一括廃棄された土器群と考えるのが自然であろう。また、土坑内より湖東地域系の調整技法を持った受口状口縁鉢、北陸系と共通点をもつ小型鉢が出土している。今回の調査によって明らかになったことは少ないが、今後の調査成果の増加や研究の進展をもって、当遺跡の様相を明らかにしたい。

(遠藤)



S K 1 遺物出土状況



⑦ 小柿遺跡

調査管理番号
2020R100-03

栗東市文化財調査報告書第181冊

調査地 栗東市小柿385番1、386番1ほか
調査期間 2021年1月12日～2021年12月3日
調査面積 約393m²



調査地位置図

はじめに

小柿遺跡は、滋賀県栗東市の北部に位置し、標高97m～98m前後の扇状地上に存在する。葉山川の左岸に位置し、中沢遺跡と接している。

過去の調査では、縄文時代中期から近世以降の複合遺跡であることが明らかになっている。今回の調査地周辺では、2005年度2次調査で古墳時代前期の河川が確認され、木製の琴が出土し注目された。また2020年度2次調査で、北側隣接地にあたる調査区から河川の続きと古墳8基が確認されている。

遺構・遺物

河川N R 1は、調査区の東南端から北西方向に向かって蛇行しながら延びる河川で、2005、2020年度に確認された河川の続きと推定される。検出長約58m、幅約4～7m、深さ約1m前後である。南端から約10m北側の河川が屈曲する部分で木器が多く出土している。その西側に接して杭を打ち込んだ土坑状になった部分があり、梁状の施設であったと推測される。またN R 1北西側肩口の上層にあたる部分が円形周溝のごとく屈曲する溝状部分（北西肩口S D）になっており、多量

の埴輪が廃棄されていた。N R 1の時期は、下層がおおむね古墳時代前期（庄内式新段階から布留式併行期）、上層がおおむね飛鳥時代から奈良時代初頭頃と推定される。

飛鳥時代～平安時代では、N R 1西側肩口よりに形成された溝S D 2がある。古墳時代の河川N R 1がほぼ埋まって、その上層にあたる部分が溝となって存在していた。時期は、出土した土器から、7世紀に形成され8世紀初頭に埋没したと推定される。掘立柱建物S B 1は、現状桁行2間（5.0m）以上、梁行2間（4.8m）の建物である。時期は出土した遺物からおおむね8世紀末～9世紀前半頃の建物と推定される。このほか柵S A 1、S A 2などがある。

近世以降として、井戸S E 1 5がある。平面形は円形で、大きさ径南北3.2m、東西2.9m、深さ約1.8mである。約1.1m下げた地点で、竹によって組まれた井戸枠が確認されている。また、井戸枠の直ぐ上から東西方向に太さ5cmほどの木が6本並んでいた。使用しなくなった井戸に落ちないように蓋をしていた可能性がある。時期は、出土した信楽産の鉢や瀬戸美濃系の陶磁器小片から19世紀以降の所産と推定される。このほか同時期の所産として土坑S K 5、S K 1 4がある。

出土した遺物は、土師器、須恵器などの土器類のほか、埴輪、石製品（磨製石斧、石鎌）、木製品（木錘、建築部材）が出土している。

埴輪は、円筒埴輪と朝顔型埴輪がある。木器は、農具（編具として木錘が2点）、家具（腰掛）、容器（槽3点）、建築部材（梯子3点、台形に整形された板材、端部に輪窓込仕口を施した細長い板、面の両端に接合用の細長い溝が設けられた板、中央に径50cm前後円形の孔があけられた板材など）が出土した。このほか、鉄滓、炉壁片が出土している。



調査地遠景（北西から）



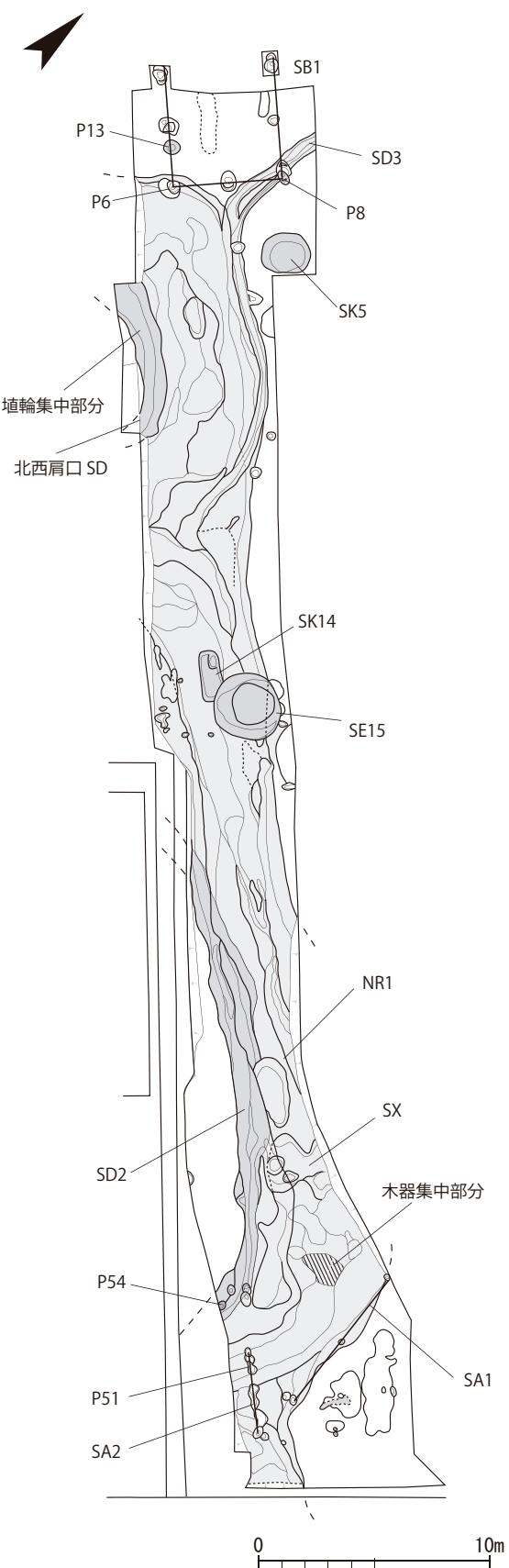
調査地遠景（南東から）



NR 1 木器集中部分（東南から）



NR 1 東南梁状遺構（北から）



調査地遺構図



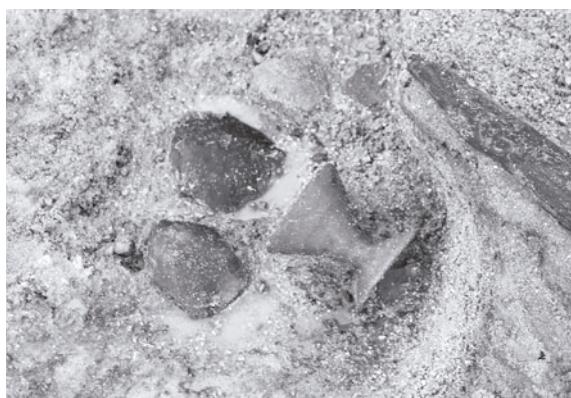
S B 1、S K 5、N R 1 (北西から)



N R 1 庄内甕出土状況



S E 1 5 中段部分、S K 1 4



N R 1 器台出土状況



S E 1 5 完掘状況



N R 1 脚付壺出土状況



N R 1 槽出土状況



N R 1 庄内甕出土状況



N R 1 北西肩口 S D埴輪出土状況



N R 1 北西肩口 S D埴輪出土状況

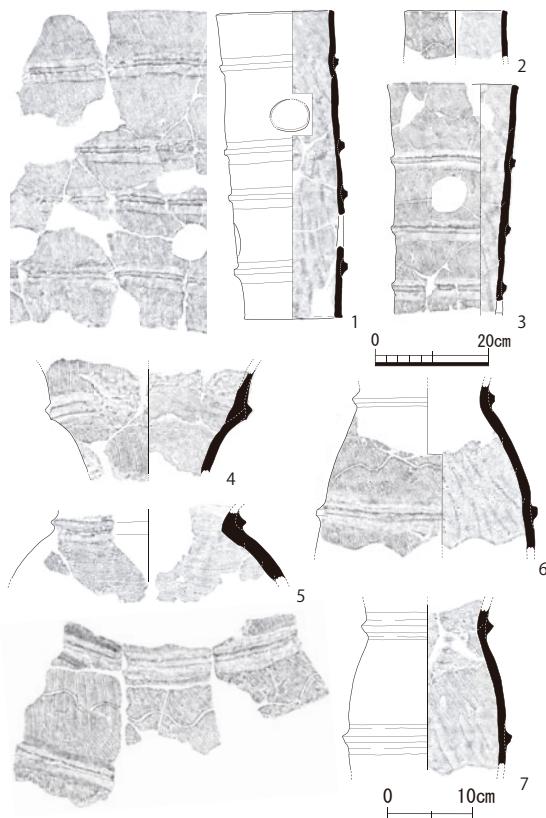
まとめ

今回の調査で注目されるのは、古墳時代の河川からまとまった木器が出土したことと、7世紀代と推定される河川の上層に相当する溝から多数の埴輪が出土したことである。埴輪が出土したN R 1の上層部分にあたる溝（北西肩口 S D）の時期は、7世紀代と推定され、埴輪自体の時期（推定6世紀前半）より新しい遺構であるとみなせる。周囲からは古墳が多数確認されていることから、おそらく6世紀末から7世紀前半にかけて行われた土地の開発に伴い、古墳を破壊し、墳丘に並べられていた埴輪も河川や溝を埋めるために廃棄されたと推測される。

木器については、用途がはっきりしない建築部材が何点かみられ、下面に溝をもつ長方形の板3点と、円形に割り貫かれた正方形に近い板は、おそらく別の材と組み合わせて使用する建築材のパーツであった可能性がある。いずれも大型のつくりで、付近に大型建物が

存在していたことを推測させられる。今後有力豪族の拠点的な施設が発見される可能性を考えておきたい。

（近藤）



N R 1 北西肩口 S D出土埴輪実測図



N R 1 北西肩口 S D出土円筒埴輪

⑧ 下鉤遺跡

調査管理番号
2020R095-01

栗東市文化財調査報告書第182冊

調査地 栗東市苅原84番・85番・86番一部
調査期間 2021年2月15日～2021年9月17日
調査面積 307.89m²



調査地位置図

位置と環境

下鉤遺跡は、琵琶湖へと流入する多数の河川群が形成する扇状地の先端部に位置している。今回の調査区近辺である苅原地域での調査では、布堀構造の大型建物（1992年調査）や、特殊棟持柱建物（1997年調査）、建物と同時期の遺物を包含する河川跡などが検出されている。河川からは銅環や銅鏃、水銀朱の付着した石杵など、特徴的な遺物が多数出土している。また、2010年に行われた調査区隣接地での調査では、多数の掘立柱建物の他周溝付建物、自然流路、大溝などが検出されている。自然流路からは槽づくりの琴が出土している。調査区内の基本層序は、層厚40cmの耕土の下に遺構検出面である黄褐色粘質土層に到達する。標高はおよそ95mである。

遺構・遺物

S D 1 調査区内北西部でL字に折れ曲がる溝で、幅が0.6m、深さが0.3mである。近隣の調査で同様の溝をもった方形周溝墓が検出されていることから今回検出された溝も方形周溝墓に伴うものであるとみられる。包含さ

れる土器も、細片で形状不明のものが多く、受口状口縁とみられる土器片も確認できるが、いずれも溝堆積土中からの出土で、溝の使用時期推定の根拠となるものが乏しい。

S D 1 5 調査区中央付近を南北に横切る溝である。遺物の包含量も少なく、混入物とみられるサヌカイト片が1点出土している。中世以降の耕作痕の一部とみられる。

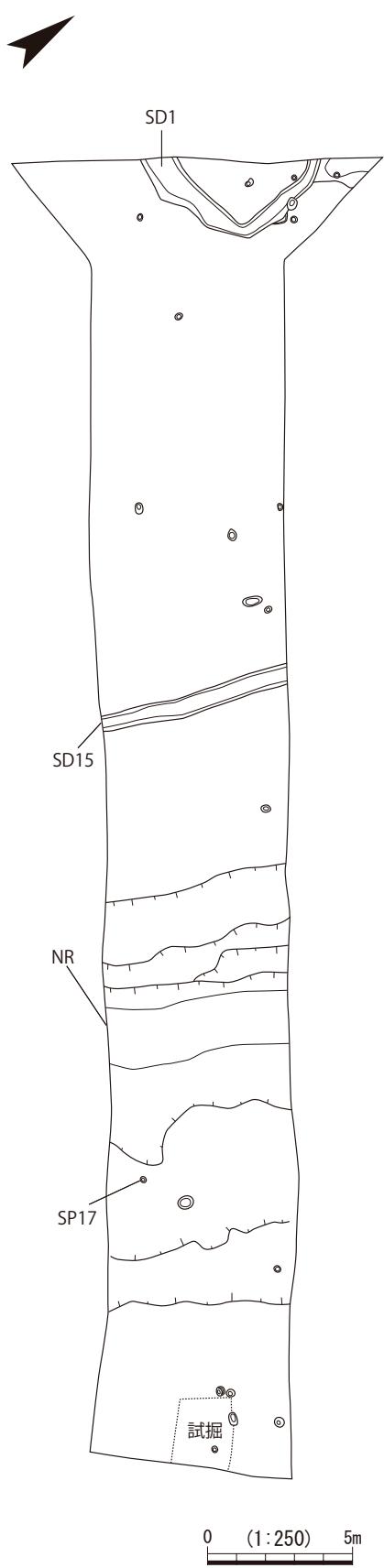
N R 2010年の調査で検出された大溝を伴う自然流路部分の延長とみられる。下層から順に、砂層、腐植土層、粘質土層と堆積している。遺物は上層の粘質土層に包含されるが、遺物量は少ない。

流路出土遺物は以下の通りである。1,2,3は受口状口縁壺である。いずれも摩耗が激しい。口縁部の屈曲はいずれも甘く、端部を外方につまみ出している。4,5は高杯脚部である。いずれも脚部中央部に孔を持ち、4は三方に孔を持つ。6は須恵器杯蓋である。口縁部から胴部にかけて、全面ナデ調整を施す。底部は未調整である。7は石鏃の未製品である。高さ約1.8cm、幅2cmで、基部に打欠の痕跡がみられることから、凹基無茎鏃を作成する最中に先端部が折れ、放棄されたものとみられる。石材はサヌカイトとみられる。8は石鏃である。無茎鏃で、基部に抉りがある凹基無茎鏃である。高さ約3.5cm、幅約2cmでサヌカイト製とみられる。

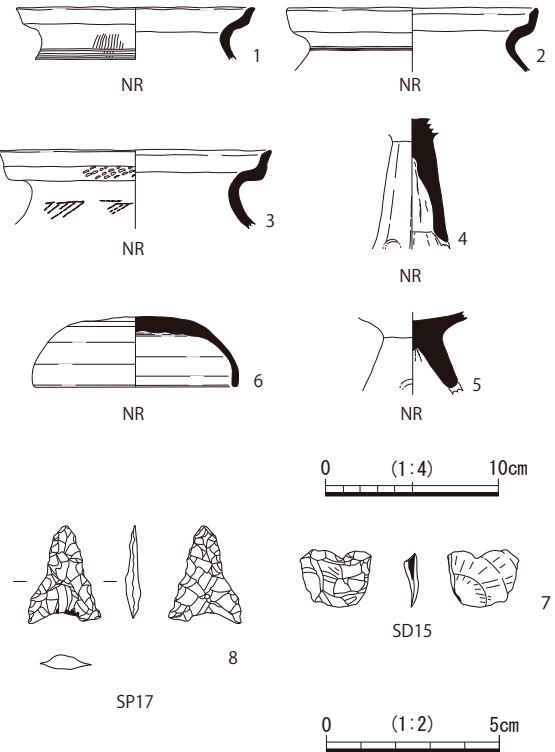
まとめ

周辺調査の成果を参考に調査成果を考えると、今回の調査地は弥生時代中期から後期において、遺構密度が標高の高い調査地北部以外はまばらであることから、微高地に形成された環濠集落の間に立地する、河川流域が伴う低湿地帯であったとみられる。

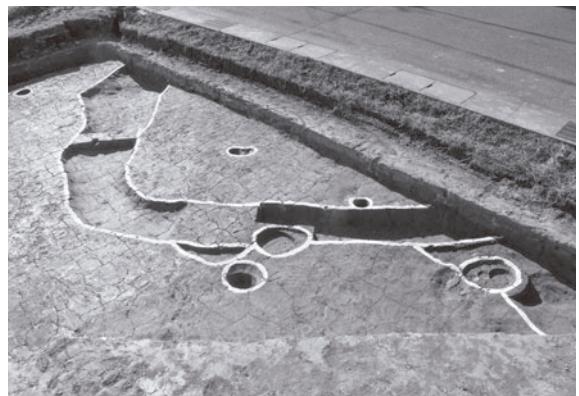
（遠藤）



遺構平面図



出土遺物実測図



SD1 方形周溝墓



NR出土石鏃

⑨ 下鈎遺跡

調査管理番号
2021R095-01

栗東市文化財調査報告書第183冊

調査地 栗東市苅原83番、85番・86番一部
調査期間 2021年4月26日～2022年2月4日
調査面積 591.24m²



調査地位置図

位置と環境

下鈎遺跡は、琵琶湖へと流入する多数の河川群が形成する扇状地の先端部に位置している。今回の調査区は同報告内で記述されている調査管理番号2020R095-01の延長部分にある。2010年に行われた調査区隣接地での調査では、多数の掘立柱建物の他周溝付建物、自然流路、大溝などが検出されている。自然流路からは槽づくりの琴が出土している。調査区内の基本層序は、層厚0.4mの耕土の下に遺構検出面である黄褐色粘質土層に到達する。標高はおよそ95mである。

遺構・遺物

S D 1 0 ・ S D 1 2 ・ S D 1 3 ・ S D 1 5 は、調査区内中央で検出された溝群で、調査範囲内で半円形の様相を呈する。細かな土器片を多く包含し、遺物から弥生時代後期の遺構とみられる。溝より内側では、同時期のピットが検出されていることから堅穴建物に伴う区画溝と考えられる。

N R 調査区内道路際の北端にあたる部分で検出された。北西から南東方向にかけて流域

が延びており、幅は不明であるが、2010年度調査で検出した流路の一部が検出されたものとみられる。遺物の包含は極少量であった。S X 7 9 調査区内道路際南部で検出された。北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。自然に出来た窪みに遺物が堆積したものとみられる。遺物は中世のものが主であり、いずれも細片である。

調査区全体の遺物の出土量は少なく、いずれも細片であったため出土量に対して実測点数は少ない。凡そ出土遺物の傾向として、S X 7 9 及び包含層からは中世の遺物、その他溝等の遺構からは弥生時代後期の遺物が出土した。

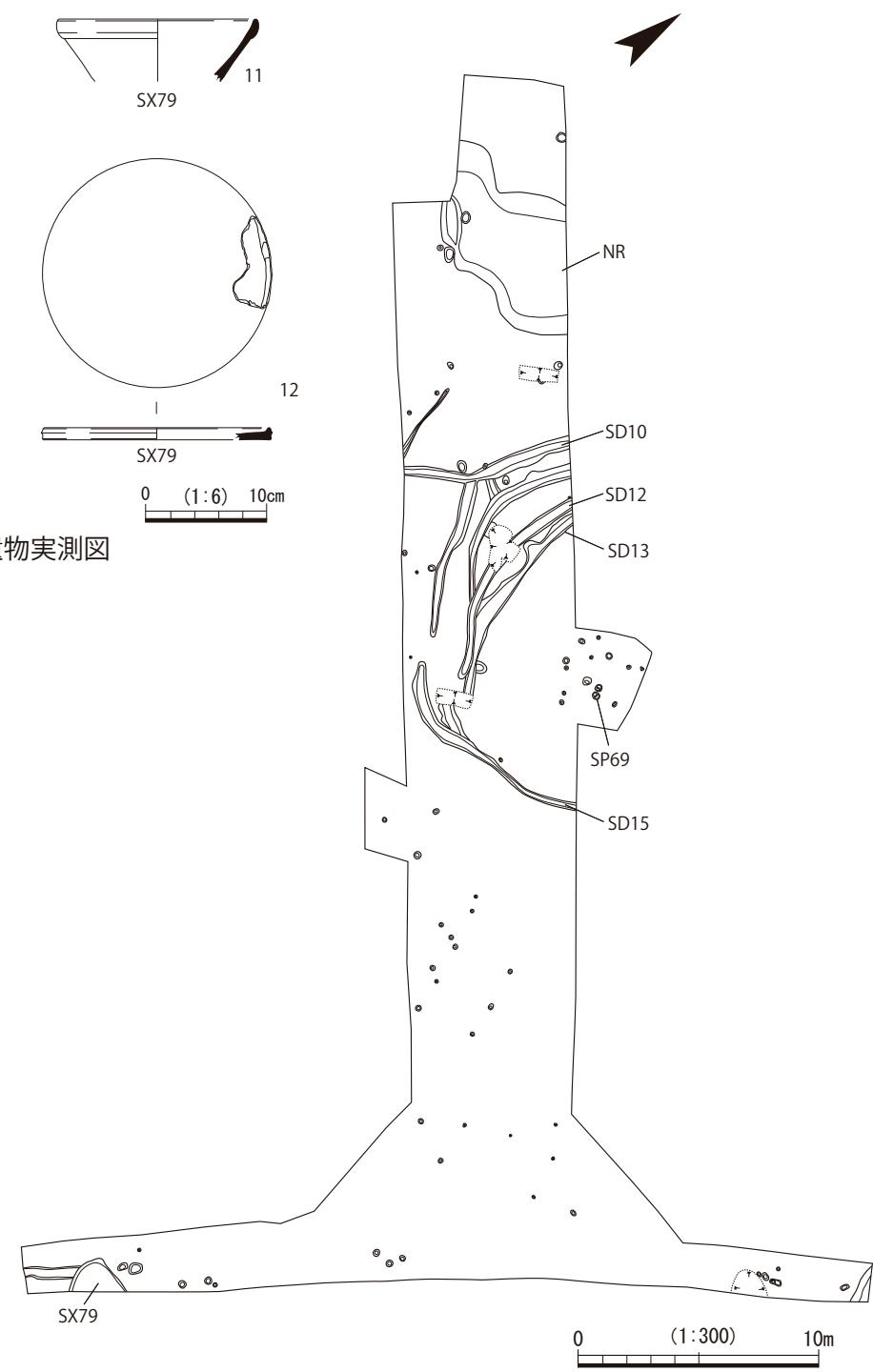
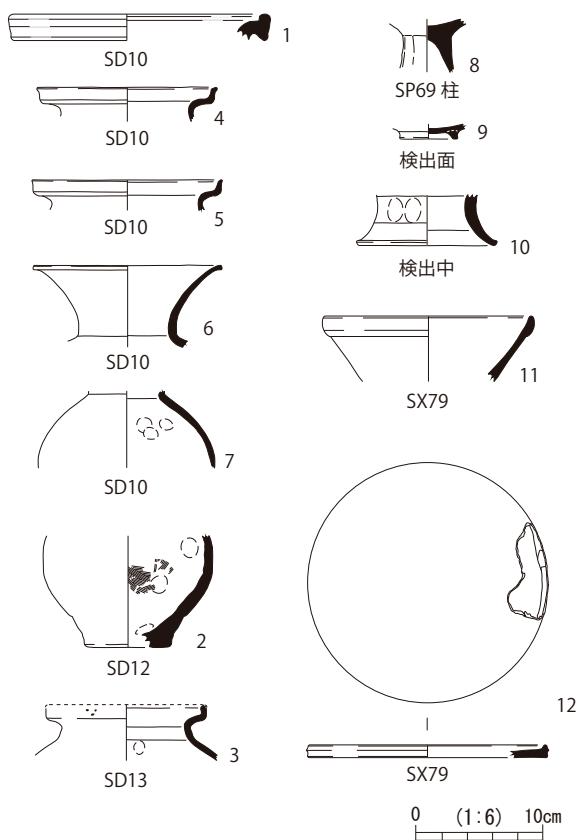
溝群からは多数の遺物が出土したが、摩滅、細片が多く、実測に耐えうる土器点数はごく少数であった。国産陶器の壺、土師器壺、受口状口縁甕、土師器高杯などが出土した。

調査区南部の落ち込みである S X 7 9 からは中世の土器が出土した。1 1 は白磁碗である。1 2 は円形状の銅製品である。形状と厚みから銅鏡とみられる。

まとめ

今回の下鈎遺跡の調査は、前回調査と比較して堅穴建物に伴うとみられる3重の区画溝とピット群、流路を検出した。溝群、ピット群は共に切り合いを伴いながら検出されており、堅穴建物の建て替えを何度も行った結果とみられる。2010年度の下鈎遺跡調査では、平安時代以後の区画溝と掘立柱建物、耕作痕などを検出していることから、包含層およびS X 7 9 から出土した中世以降の遺物はこれらの時期と同時期のものであると考えられる。

(遠藤)



⑩ 高野遺跡

調査管理番号
2021R092-01

栗東市文化財調査報告書第185冊

調査地 栗東市高野560番1、561番2
調査期間 2021年6月1日～2021年12月24日
調査面積 約181m²



調査位置図

はじめに

2019年度3次調査では、今回の調査区北西と西南側にあたる周囲が広範囲にわたって調査が行われた。河川や溝の影響によって建物遺構はほとんど確認されず、2019年度2次調査の続きが南端で一部確認されている程度である。西側に隣接するトレーナーでは、おおむね飛鳥時代の大溝が確認されていたため、今回の調査地に続くことが確実視されていた。

遺構・遺物

今回確認された遺構は、飛鳥時代から近代以降までⅠ期～Ⅴ期の5つに分けられる。

Ⅰ期（飛鳥時代）の遺構として、SD1、SD2が存在する。SD1は、2019年度1次調査から続く、調査区のほぼ中央部全体に確認されている北西から南東方向にのびる大溝である。現状で検出長約13.6m、幅約3.9～5m、深さ0.8～1.2mである。南東端には南側にのびる幅1.7～2.0m、深さ0.1m前後の支流SD2が付属している。堆積は大きく2時期にわたって形成されている。時期は、6世紀末から7世紀後半の所産と推定される。溝に伴う柵のような遺構である可能性をもつ柱列SA3～SA10が存在する。

Ⅱ期（平安時代前半）では、SB1、SX51

が存在する。SB1は、総柱式の掘立柱建物で、桁行2間、梁行2間で構成される。大きさは一辺4.5～5.0mである。出土した土器から、おそらく平安時代前半9世紀代の所産と推定される。土坑SX51は、平面形が隅丸方形状をした土坑内に5本の柱によって構成される遺構である。大きさは、おおむね掘方一辺約2.1mで、深さ0.18～0.24mである。柱は1間×1間で南側に棟持ち柱的なものが存在する。時期はおおむね9世紀代以降と推定される。

Ⅲ期（平安時代後半）では、SB3、SA2、SA11～SA13、P77、P100が存在する。SB3は、現状、桁行3間、梁行1間以上の掘立柱建物と推定され、調査区外である北東側にのびるものと推定される。南側には3本の柱で構成される2間の庇が付く。時期は、P38から出土した土器より10世紀代以降の所産と推定される。

Ⅳ期（室町時代）では、SB2、SA1が存在する。SB2は、桁行1間（1.9m）、梁行1間（1.7m）で構成される掘立柱建物である。時期は、P53から出土した土器より14世紀代以降の所産と推定される。SA1は、SB2、SB3に接して存在する3本の柱で構成された現状2間（2.4m）の柱列で、北東側にのびる掘立柱建物の一部である可能性がある。時期は、14世紀代とされるSB2より新しく、P40から出土した土器より14世紀代以降の所産と推定される。

Ⅴ期（近世～近代以降）では耕作痕が存在する。重複関係から2時期に細分される。

出土した遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器のほか、鉄器（U字形鋤の鋤先、鉄釘）、鉄滓、石器（砥石）などがみられる。

（近藤）



調査地全景（東南から）



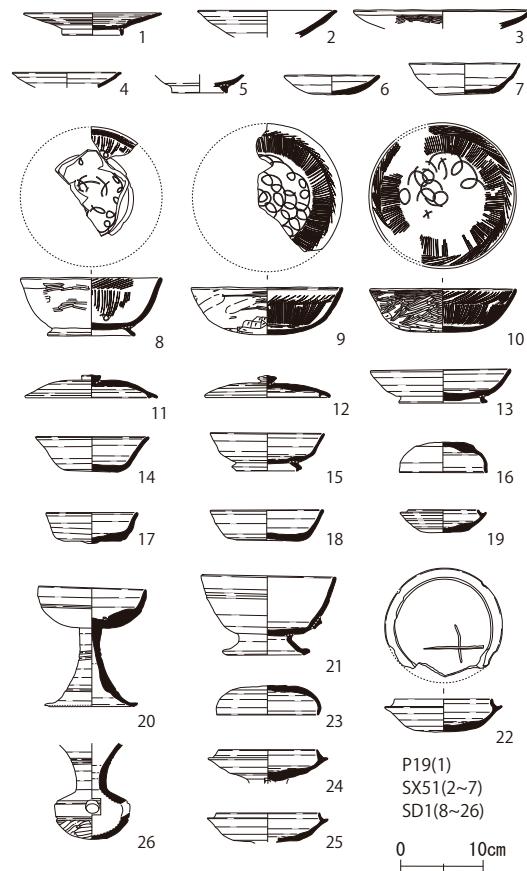
調査地全景（北から）



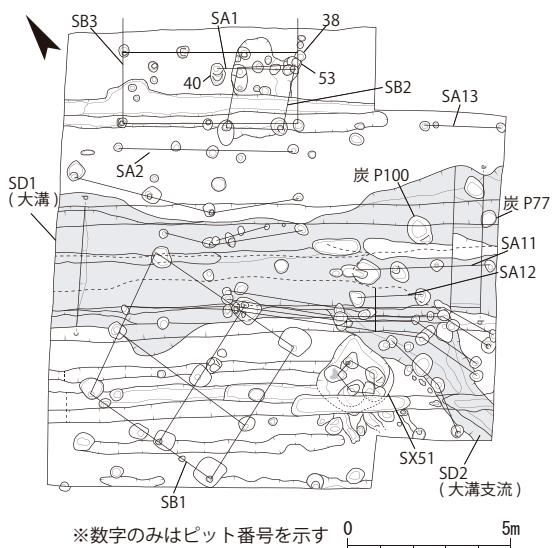
S X 5 1



S D 1 肩口出土須恵器、鉄器



出土遺物実測図



調査地遺構図

⑪辻(出庭)遺跡 調査管理番号 2021R003-01 栗東市文化財調査報告書186冊

調査地 栗東市出庭628番
調査期間 2021年7月19日～2022年1月28日
調査面積 208m²



調査地位置図

位置と環境

辻遺跡は野洲川左岸にあり、野洲川が形成した自然堤防状の微高地に位置する。古くは縄文時代中期から集落が確認される。一方で、弥生時代を通して集落らしき遺構はほぼ検出されていない。古墳時代に入り、鋳鉄関連遺構や玉造関連遺構などの工房遺構を含む大規模な集落が検出される。古墳時代から活動痕跡がみられる傾向は、野洲川左岸の微高地地域に立地する高野遺跡と同様である。近隣の調査では、今回の調査地から約250m東の地点で行われた2008年の調査で、6世紀前半を中心とした、5世紀中頃から6世紀末にかけての竪穴建物が数十棟検出された。

調査地周辺の標高は約105m、遺構面の標高は約104mを測る。

遺構

S I 1 S I 2を切る形で検出した。東西方向約5.5m、南北方向約5.5mを測る。4本主柱穴で壁溝を持たない。西側壁面にカマドを有し、中央に粘土塊の支柱を確認する。竪穴床面中央部は固く叩き締められており、貯蔵穴は確認できなかった。

S I 2 調査区内最西部より検出した。南北方向約4.7m、東西約4.5mを測る。4本主柱穴で、壁溝を持たない。北部壁面沿い中央にカマドが位置する。煙道は検出されなかった。中央に支柱と思われる粘土塊を有する。

S I 6 2 調査区東部端で検出した。東西方向約4.2m以上、南北方向約5mを測る。出土遺物から6世紀後半の隅丸方形竪穴建物とみられる。

S I 6 3 S I 6 2に切られる形で検出した。東西方向約3.5m、南北方向約3mを測る。遺物の出土量が少なく、床面に焼土の範囲が大きく広がっていること、竪穴建物埋土中に炭片が多く混入していたことから、居住用の竪穴建物とは異なる様相を持っている可能性がある。

S I 6 5 S I 1に切られる形で検出した。今回検出した中で最も古い竪穴建物とみられる。主柱穴は検出されず、竪穴北東端部に貯蔵穴とみられる土坑が検出される。トレンチ内で東西方向約2.5m以上、南北方向約4m以上を測る。

S K 5 0 S I 6 5に付随する土坑で、土坑壁面・底面に焼土が残存していることからカマドとみられる。土坑中央部に土師器の壺が据え付けられている。

出土遺物

調査区内での遺物の出土は竪穴建物及び建物に伴うカマドからが殆どである。

S I 1 出土土器 2, 4は須恵器杯身である。3は須恵器高杯蓋である。1は土師質のミニチュアの土器である。胎土が非常に荒く、2mmから3mm大の小石を多く含む。焼成が甘く、表面が剥離した痕跡がみられる。

S I 2 出土土器 5, 6, 9は須恵器杯蓋である。11は須恵器高杯である。7は須恵器短頸壺である。10は土師器椀である。8は須恵器壺口縁である。17は土師器壺である。

S K 5 0 出土土器 18は土師器壺である。カマド中心部に据え付けられていた。カマド被熱土層と土師器壺の間には灰層が挟まっており、土師器壺に被熱痕跡や煤が付着していないことから、カマドとしての使用が終了した後、中央部

に埋納したものとみられる。

S19は土師器甌である。外面ハケ目調整、内面横方向ハケ、ケズリ調整で成形する。

遺構面検出中に滑石製の有孔円板が出土した。2008年の調査でも同様の有孔円板は多数出土していることから、辻遺跡周辺で加工された滑石製品の不良品が廃棄されたものとみられる。

まとめ

今回の調査区内では竪穴建物が明確なもので5棟検出された。遺物からみていずれも6世紀前半頃の竪穴建物とみられる。建物内にカマドを持つものが3棟あり、S163の床面には炭層が全体的に広がり、一部床面にも焼土を検出したことから鍛冶工房等の特殊な建物であった可能性が考えられる。S12、S163、S165とS11、S162は竪穴建物の方向軸が時期により分かれており、前者の古い竪穴建物群は正南北方向からやや西に傾く。切り合い関係も方向軸の変遷と矛盾しないことから、調査区内の竪穴建物は短い時間の中で一度建て替えられたとみられる。1983年の調査でも竪穴建物からミニチュアの土器が出土しており、辻（出庭）遺跡周辺では同様の出土事例が散見される。

辻（出庭）遺跡で6世紀前半の遺構は1983年、2008年の調査で検出されている。両調査は野洲川が作り出した自然堤防状の微高地に立地しており、竪穴建物が密集して建てられている。今回の調査区も同じ自然堤防の延長上に立地しており、有孔円板が出土していること、ミニチュア土器が竪穴建物埋土から出土していることなどの特徴が共通していることから、集落としての関連がみられる。

今回の調査によって、古墳時代前期に鍛冶工房、玉造工房を備えた大規模集落である辻（出庭）遺跡は、6世紀前半の時期においても、1985年・2008年調査で検出された大型建物を中心として、ある程度の広がりを持った集落であったことが明らかとなった。
(遠藤)



写真1 S163床面直上出土須恵器



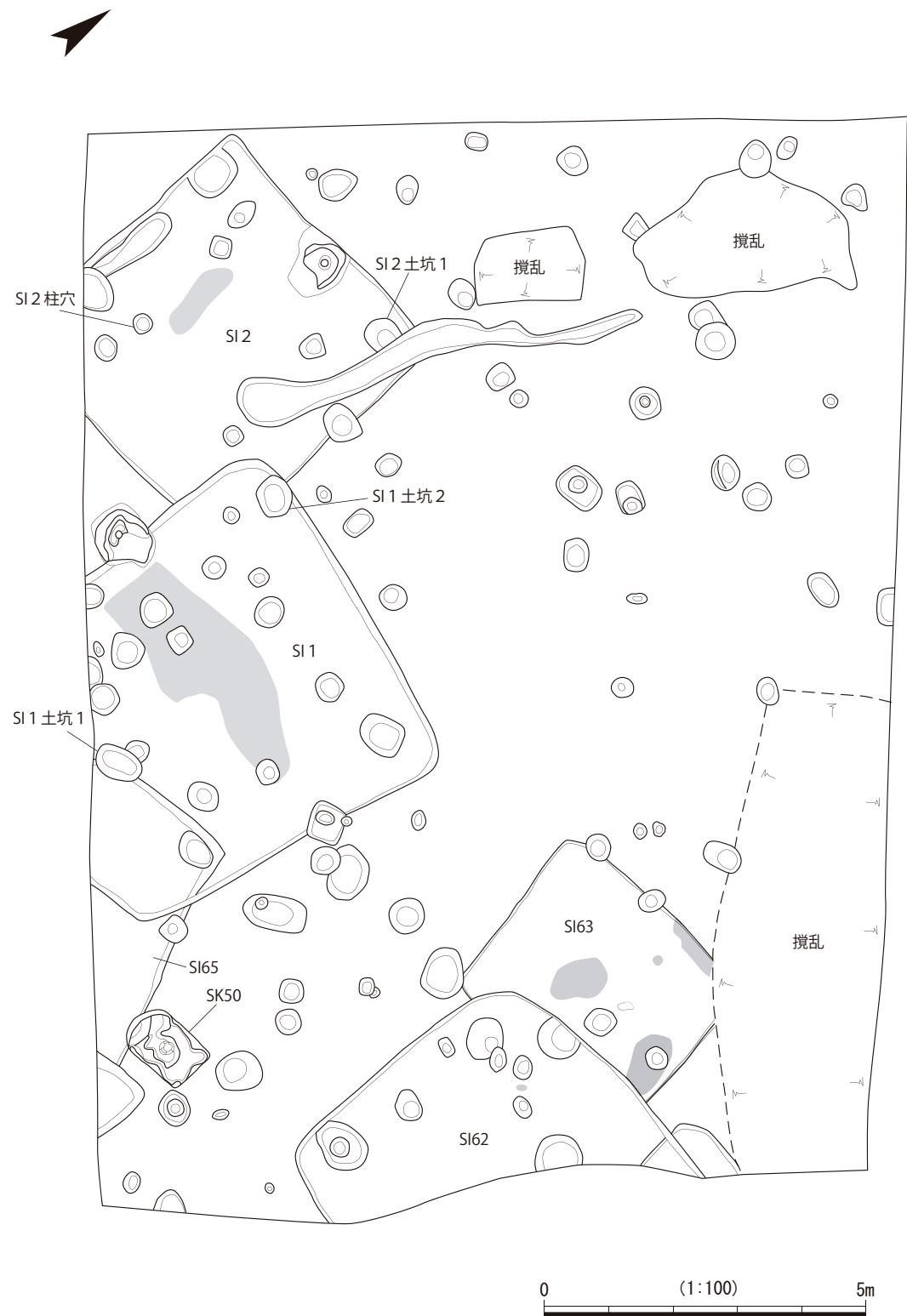
写真2 調査区内完掘状況



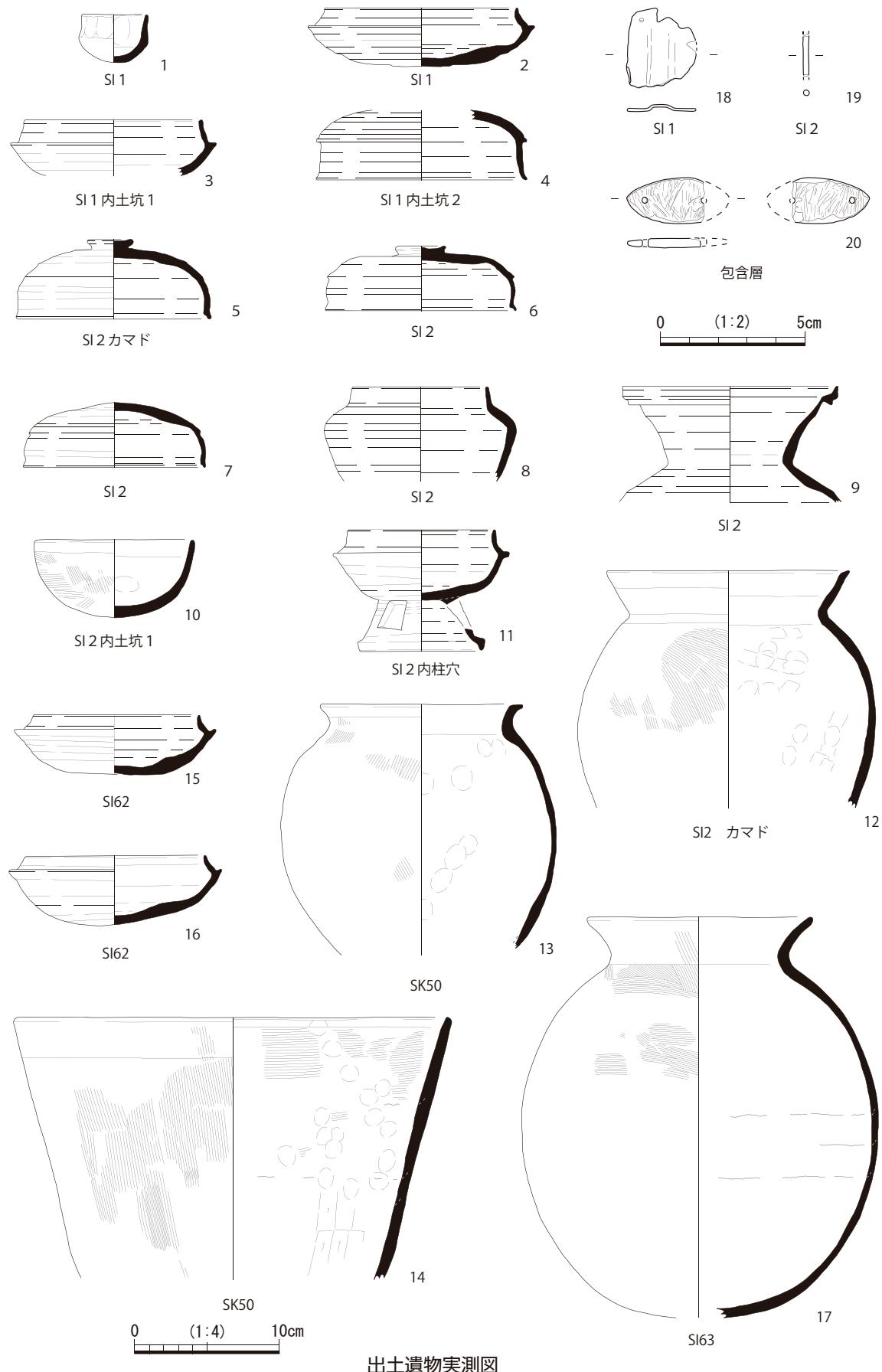
写真3 SK50埋設土師器壺



写真3 S12出土鐵製品



遺構平面図



出土遺物実測図

市内遺跡範囲確認調査

2021(令和3)年度 市内遺跡範囲確認調査

2021年度（令和3年度）は、市内の遺跡地において、宅地造成工事など各種開発・土木工事等にともなう遺跡内容を確認するため、試掘による範囲確認調査を68件行った。うち26件で遺構を確認し、その内2件で保護層が確保され、1件が開発取り下げ、13件を市教委で発掘調査を実施した。以下、主な調査について触れる。

No.16・17・19・53 小柿遺跡

調査地は小柿遺跡の遺跡範囲の中央、治田西小学校の南西約150mの地点に位置する。

令和3年1～3月に実施された宅地内道路の発掘調査では流路やその埋土から円筒埴輪が検出されている。また、北西側の敷地において令和2年10月から12月に実施された発掘調査では八基の古墳が検出されており、古墳時代における小柿遺跡の墓域と考えられる。

紹介する4ヵ所の調査区は何れも個人専用住宅の建設に関わるものである。その基本層序は、地表から0.8～1.1mの造成土（表土）と部分的に残る旧耕作土、層厚約0.1mの旧床土（黄褐色粘質土）を除去すると、黄褐色シルトの遺構面に至る。

検出された古墳時代の遺構は、No.16・17では検出幅1.5m、検出深0.4mを測る南北方向に流れる溝で、7～8世紀代を中心とする須恵器や土師器が出土した。No.53では検出幅約4m、検出深0.5～0.65mを測り、南側から北側に向かって流れる溝が検出された。埋土中からは8世紀代の須恵器が出土している。古墳時代の大溝の性格については調査区が限定されるため詳らかでないが、円筒埴輪片など墓域に関わるものは出土しなかった。

古墳時代以降は、大溝埋没後の層上にピットが作られ、宅地内道路の調査では栗太郡主条里に沿った掘立柱建物が検出されている。No.19で検出された大溝は、検出幅2.5～3.5m、検出深0.5mを測り、層中からは10～11世紀代の灰釉陶器や土師皿が出土しており、中世前期に集落が展開したことが窺える。



図1 小柿遺跡 遺構図

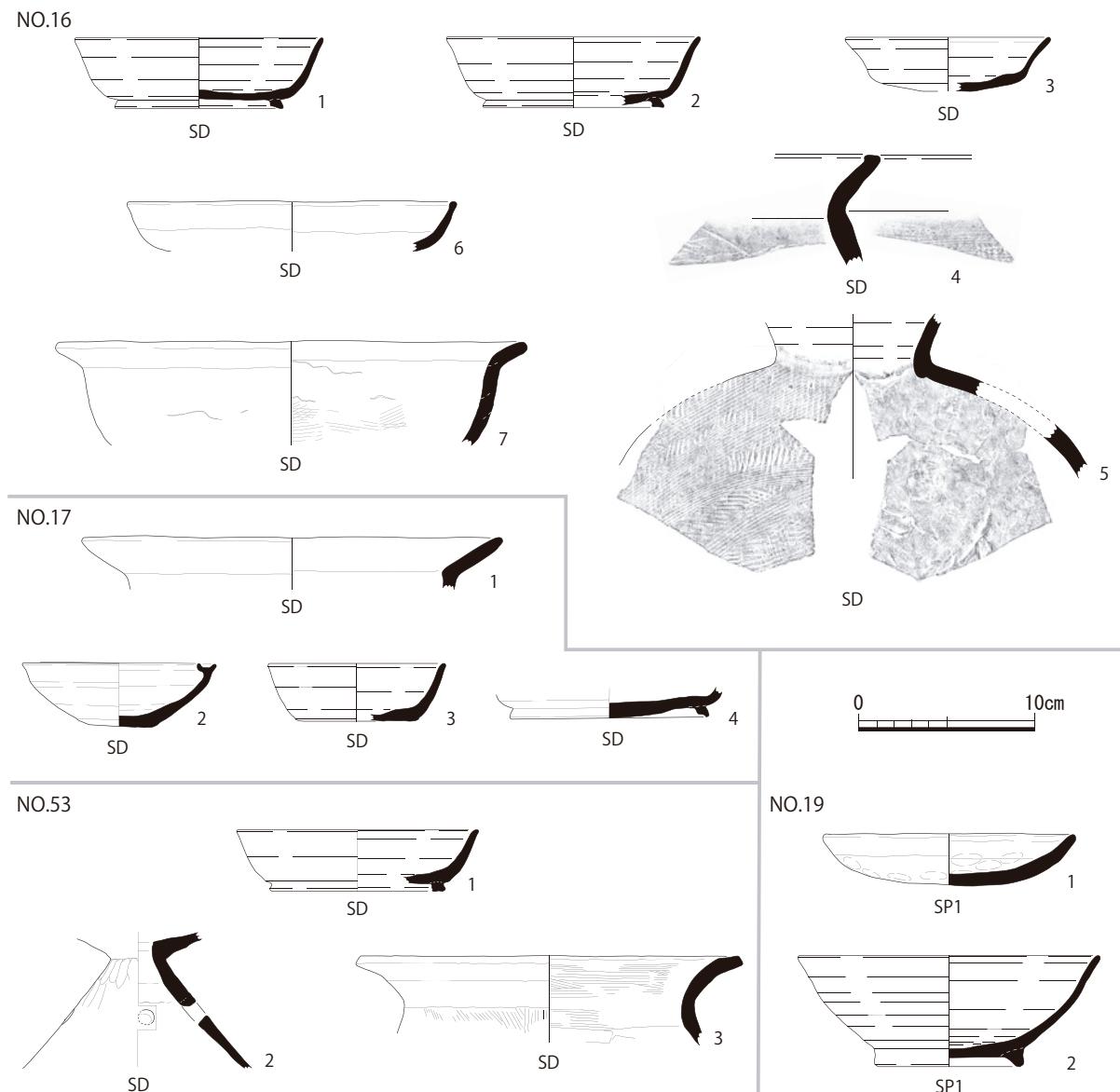


図2 小柿遺跡 出土遺物実測図

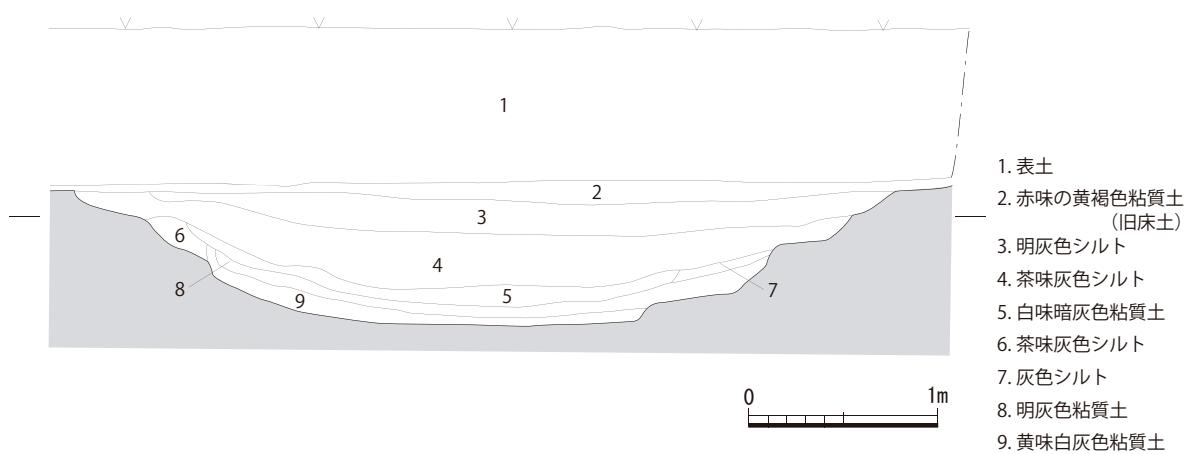


図3 小柿遺跡（53）北壁断面図

2021(令和3)年度 市内遺跡範囲確認調査一覧

No.	遺跡名称	場所	結 果	対象面積	種別	調査日時	原 因	備 考
1	坊袋	目川1676、1677、1678	ピット・溝	1,187.00	補助金	3.04.22	保育園	工事取り下げ
2	小柿	小柿4-247-8他	旧河道	172.23	補助金	3.04.23	個人住宅	市教委調査
3	下鈎東	上鈎57-1	豎穴・土壙	833.87	補助金	3.04.23	グループホーム	保護層確保
4	縄	北中小路388の一部	遺構確認なし	202.38	補助金	3.05.07	個人住宅	
5	下鈎	下鈎1585-3	遺構確認なし	151.25	補助金	3.05.07	個人住宅	
6	小柿	小柿4-236(一部)他	流路跡・ピット・溝	2,500.78	補助金	3.05.07	宅地造成	本発掘調査
7	辻	出庭363	遺構確認なし	245.12	原因者	3.05.12	個人住宅	
8	手原	手原1-9.5-9.8	ピット	161.18	補助金	3.05.18	分譲住宅	市教委調査
9	靈仙寺・北中小路	北中小路192-1他	溝・ピット・土壙	132,257.19	補助金	3.06.07～06.10	工業団地	本発掘調査
10	高野	六地蔵1077-2他	耕作溝	431.86	補助金	3.06.22	倉庫兼事務所	市教委調査
11	上鈎	上鈎300-1、285-1他	ピット・大溝	60.50	補助金	3.06.22	店舗	市教委調査
12	上鈎・下鈎東	上鈎160-1、161	遺構確認なし	2,307.56	補助金	3.06.29	店舗・工場	
13	辻	出庭628	豎穴・ピット	581.00	補助金	3.06.29	共同住宅	本発掘調査
14	高野	六地蔵1165他	遺構確認なし	2,245.00	補助金	3.07.02～03	立体駐車場	
15	小柿	小柿5-385-1他	遺構確認なし	198.06	補助金	3.07.08	個人住宅	
16	小柿	小柿5-385-1他	ピット・流路跡	161.49	補助金	3.07.08	個人住宅	市教委調査
17	小柿	小柿5-385-1他	流路跡	151.48	補助金	3.07.08	個人住宅	市教委調査
18	野尻	野尻414-1、442他	遺構確認なし	1,951.61	補助金	3.07.12	老人ホーム	
19	小柿	小柿5-385-1他	流路跡・ピット	151.47	補助金	3.07.12	個人住宅	市教委調査
20	岩畠	高野474-8	遺構確認なし	152.50	補助金	3.07.20	個人住宅	
21	高野	高野234	豎穴・ピット・溝	44,504.55	補助金	3.07.20～21	工場	市教委調査
22	小槻大社古墳群	下戸山1200	遺構確認なし	10,741.00	原因者	3.07.21～07.29	防火設備建設	
23	辻	出庭791-1の一部	遺構確認なし	147.13	原因者	3.07.29	農業用倉庫	
24	縄	北中小路40-5	遺構確認なし	16,047.00	補助金	3.08.02	個人住宅	
25	十里・靈仙寺	十里81	遺構確認なし	937.83	原因者	3.08.03	保育所	
26	北尾	小野140-1、140-2	古墳・平坦面	8,132.00	補助金	3.08.04～05	工業団地	本発掘調査
27	小槻大社古墳群	下戸山1200	遺構確認なし	10,741.00	原因者	3.08.24	防火設備建設	
28	下鈎	下鈎1665-2	遺構確認なし	152.71	補助金	3.08.27	個人住宅	
29	野尻	野尻254の一部	遺構確認なし	100.00	補助金	3.08.27	個人住宅	
30	下鈎	苅原66-1-67-1-68-1	ピット	2,796.00	補助金	3.09.07	集合住宅	本発掘調査
31	下鈎	苅原83-10	遺構確認なし	151.01	補助金	3.09.07	個人住宅	
32	下鈎	苅原83-11	遺構確認なし	151.01	補助金	3.09.07	個人住宅	
33	小柿	小柿4-331	遺構確認なし	298.65	補助金	3.09.07	個人住宅	
34	狐塚	川辺419-9	遺構確認なし	164.97	補助金	3.09.09	個人住宅	
35	坊袋	坊袋180-7	遺構確認なし	150.49	補助金	3.09.09	個人住宅	
36	辻	辻400-14・400-16	掘り込み・ピット	165.10	補助金	3.09.10	個人住宅	市教委調査
37	辻	辻400-1	掘り込み・ピット	150.09	補助金	3.09.10	個人住宅	市教委調査
38	縄	縄9-759-3	遺構確認なし	237.87	補助金	3.09.14	市道路	
39	縄	縄9-759-1の一部他	遺構確認なし	913.11	補助金	3.09.14	宅地造成	
40	高野	高野322-3	遺構確認なし	618.77	補助金	3.09.28	個人住宅	
41	林	林257-1の一部他	遺構確認なし	618.77	補助金	3.09.28	個人住宅	
42	下鈎	苅原84-6	遺構確認なし	172.23	補助金	3.10.07	個人住宅	
43	下鈎	苅原13-1の一部他	遺構確認なし	278.67	補助金	3.11.01	個人住宅	
44	狐塚	川辺418-3	遺構確認なし	187.57	補助金	3.11.08	個人住宅	
45	手原	上鈎11-6-11-7他	遺構確認なし	790.24	補助金	3.11.08	事務所・作業場	
46	上鈎	上鈎396他	豎穴建物・溝・ピット	4,589.19	補助金	3.11.08	宅地造成	本発掘調査
47	手原	手原7-817-818	溝・ピット	1,052.25	補助金	3.11.30	工場	本発掘調査
48	手原	手原4-1183	溝・ピット	384.38	補助金	3.11.30	集合住宅	本発掘調査
49	靈仙寺	靈仙寺6-46-1・46-3	遺構確認なし	1,120.91	補助金	3.12.08	集合住宅	
50	小柿	小柿5-424-1	遺構確認なし	1,333.63	補助金	3.12.08	集合住宅	
51	出庭	出庭182-2他	溝・ピット	1,468.52	補助金	3.12.22	宅地造成	本発掘調査
52	下鈎	苅原83-4	遺構確認なし	150.00	補助金	3.12.22	個人住宅	
53	小柿	小柿5-385-4	大溝・ピット	200.37	補助金	4.01.05	個人住宅	市教委調査
54	小柿	小柿5-372-7	遺構確認なし	133.89	補助金	4.01.05	個人住宅	
55	下鈎	下鈎1237-8	遺構確認なし	154.33	補助金	4.01.11	個人住宅	
56	辻	辻594-3・604-1	保護層確保	3138.58	原因者	4.01.18	事務所・作業場	地山面検出も遺構・遺物なし。
57	高野	大橋4-304-1	遺構確認なし	165.56	補助金	4.01.31	個人住宅	
58	縄	縄	遺構確認なし	618.77	補助金	4.02.02	個人住宅	
59	上鈎	上鈎294-1	遺構確認なし	3130.92	原因者	4.02.08	店舗・工場	
60	辻	高野705	旧河道・ピット	130.19	補助金	4.02.10	個人住宅	市教委調査
61	出庭	出庭1134-2、1136一部	遺構確認なし	332.13	補助金	4.02.18	個人住宅	
62	縄	縄8-618-1	遺構確認なし	181.82	補助金	4.02.25	個人住宅	
63	下鈎	苅原302・303	土壙・落込み・ピット	1233.55	補助金	4.02.25	事務所・倉庫	本発掘調査
64	下鈎・蓮台寺	下鈎1038-1の一部	溝・ピット	406.46	補助金	4.03.07	個人住宅	市教委調査
65	靈仙寺	靈仙寺5-120-1一部他	遺構確認なし	192.83	補助金	4.03.17	個人住宅	
66	下鈎	苅原83-7	遺構確認なし	151.01	補助金	4.03.17	個人住宅	
67	手原	上鈎8-1・8-9他	ピット	2087.39	補助金	4.03.22	店舗	本発掘調査
68	上鈎	上鈎294-1	遺構確認なし	3130.92	原因者	4.03.29	店舗	



図4 調査地位置図

No.21 高野遺跡

当調査区は、高野遺跡の範囲の中でも北西端に位置する。南西側に隣接する大橋地区では、これまで古墳時代の竪穴建物がしばしば検出される一方、当調査区周辺では検出されず、比較的濃密に分布する高野西地区周辺との間の緩衝地帯としての認識もあった。しかしながら令和2年度の発掘調査によってその存在が明らかとなり、その属性が課題とされる地域となった。

本調査区は、工場敷地内で2箇所のトレンチを設定して実施した。

【T-1】

層厚約0.55～0.6mの工場整地土（盛土）、約0.15mの旧耕土、約0.03mの床土を経て、黄色味を帯びた茶褐色シルトの遺構面に至る。

遺構面では溝や竪穴建物などを検出した。竪穴建物（SI 1）は磁北より19度西に振れている。北東側と西隅が後世の攪乱で滅失するが、一辺約5m四方を計る。内部は壁溝を巡らし、西隅は貯蔵穴と目される土壙が存在し、北側に仕切り溝を設けて内部を区分けする。屋根を支える柱は四本確認でき、何れも長径0.4m程度の不整円形で、検出深は約0.3mを測る。床面中央の南寄りには地床炉が確認できた。

出土遺物は微量だが、貯蔵穴より4世紀代の小型丸底壺片が出土している。

竪穴建物はトレンチの南西側でもSI 2を確認した。磁北に対し120度東に振れている。部分検出に止まったため全貌は不明だが、方形タイプになるとみられ、内部に壁溝を巡らせている。時期を知る遺物に恵まれなかつたが、SI 1と共に集落を構成していたと思われる。

なお、トレンチ内部で検出した溝は、重複関係により竪穴建物に後出することは明らかだが、出土遺物は無く時期は不明である。用途は設置状況から耕作痕であったと考えられる。

【T-2】

層厚1.18mの工場整地層（盛土）を除去すると、青味に土色変化した黄味茶褐色シルトの遺構面が検出された。時期不明のピットや耕作痕の他、トレンチ北側で竪穴建物（SI 3）と思われる遺構の痕跡を確認した。大半が削平を受けており、検出面の硬度と僅かな土色の相違で検出を試みたところ、図示したように方形プランの痕跡を確認した。土の硬度の差異は床面を叩き締めた結果、検出面との差異が生じたと解釈できる。その内部からは、焼土が楕円状に確認でき、プランや位置からカマドが存在した可能性がある。主柱穴は北西側で検出したピット（長径0.4m）が該当する可能性がある。

【まとめ】

竪穴建物の群在、地床炉からカマドへ時期を跨って古墳時代集落が存在。集落の広がりは確実だが性格については今後の課題である。



図5 SI 1 完堀状況

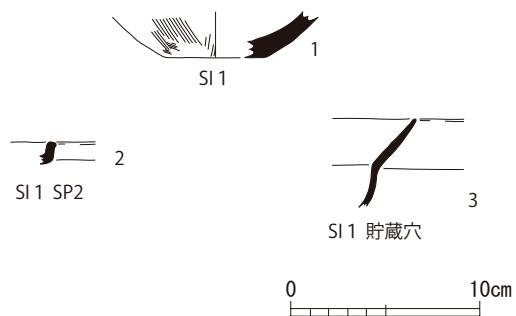


図6 高野遺跡 出土遺物実測図

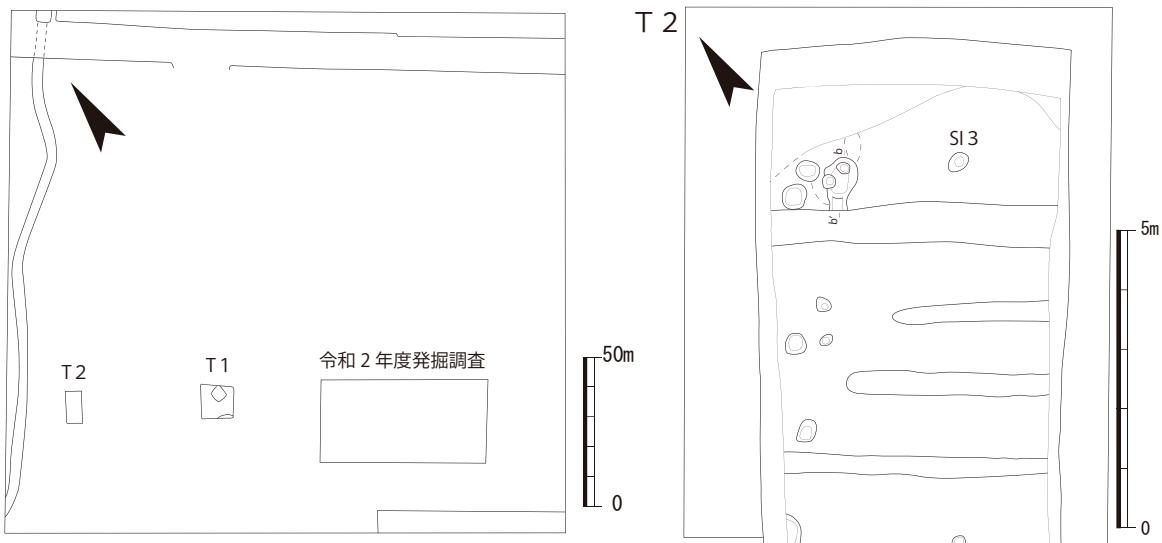


図7 高野遺跡 トレンチ配置図

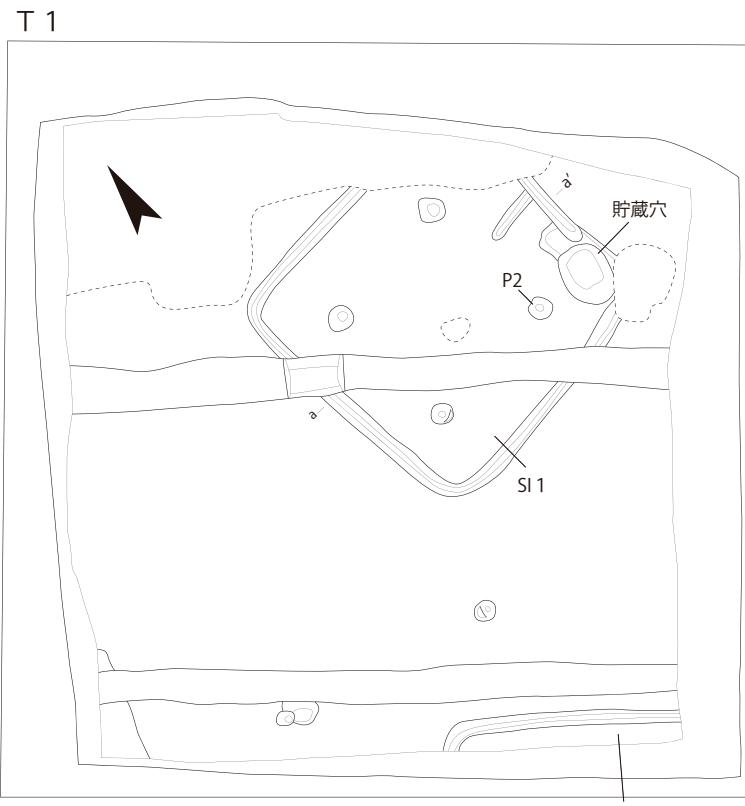


図8 高野遺跡 T1 遺構図

図10 高野遺跡 T2 遺構図

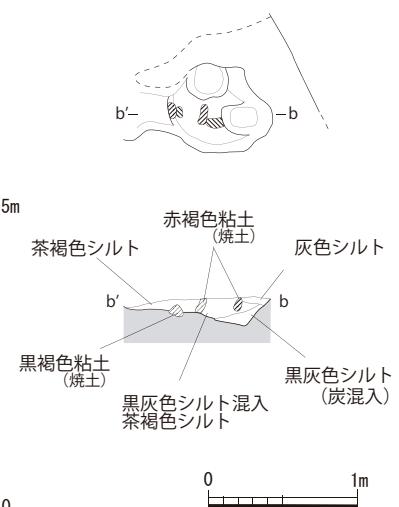


図11 高野遺跡 T2 SI 3 詳細図・断面図

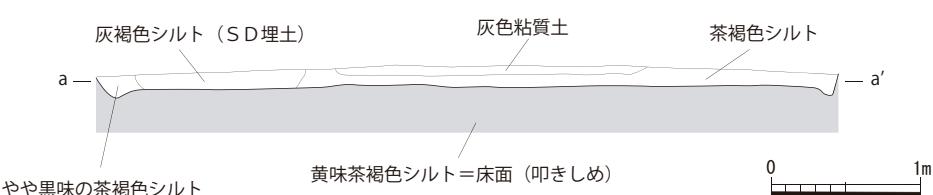


図9 高野遺跡 T1 SI 1 断面図

No36・37 辻遺跡

調査区は辻集落の中にある小坂地区の南側に位置する。基本層序は地表から0.7~0.8mの造成土（表土）を除去すると、近世から近代の鋳物師に関連する土取り穴（廃棄土壙）が存在する遺構面に至る。

この土取り穴は深さが0.6~1mとなり均一ではないが、No.36では茶褐色シルトの地山面を削平して掘り込まれている。No.37では、西側にしかなく、東側は灰色気味の粘質土となっていて、No.36の方が地山面の標高が高くなっている。

この地山面も多くの鋳物師関連の遺構で破壊されているが、この遺構の底部からは5~6世紀代の遺物がまとまって出土している。当該期の明確な遺構は認められなかったが、古墳時代集落が現集落下でも展開したことが想定される。

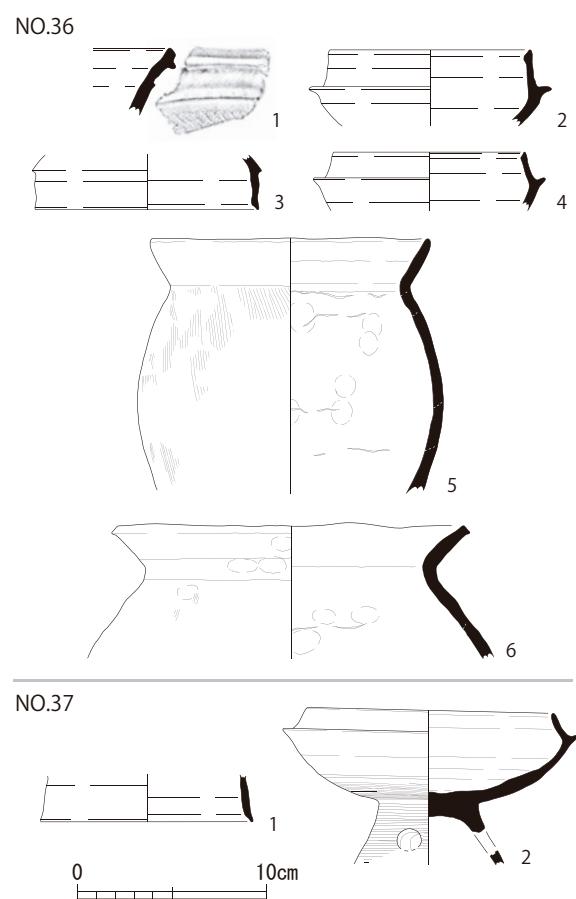


図1-2 辻遺跡 出土遺物実測図

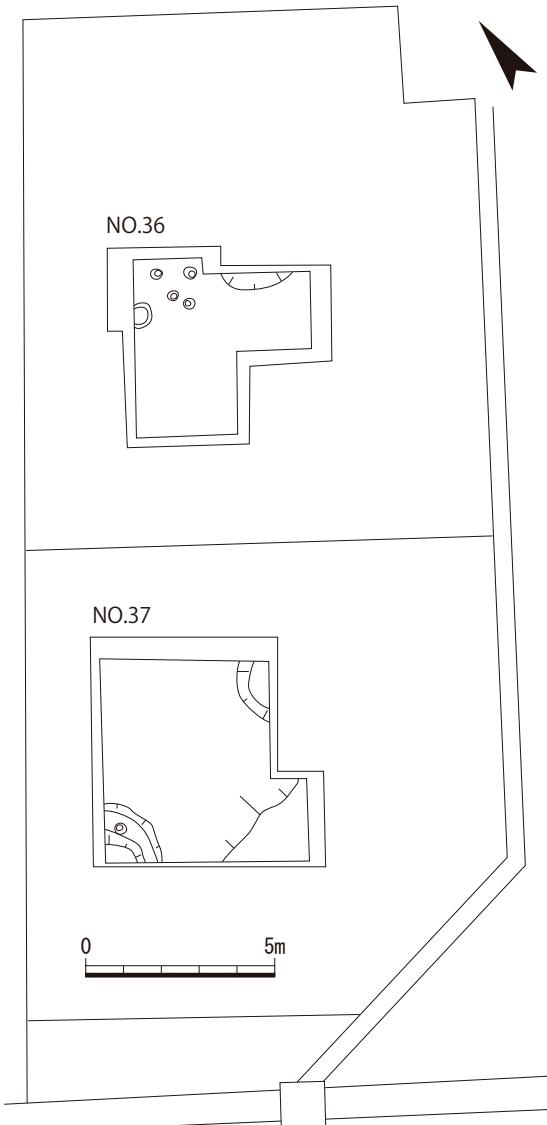


図1-3 辻遺跡 (36・37) 遺構図



図1-4 No.36辻遺跡 ピット掘開状況

No.8 手原遺跡

調査区は手原遺跡の遺跡範囲の中で最も東辺に位置する。南50mには古代東海道を踏襲した近世東海道が走り、交通の要衝を窺わせる。手原遺跡の中枢である官衙・寺院群は、正南北方向を軸とする条里（手原条里）にあるが、調査区は手原条里が東に35度傾く栗太郡主条里の変換点付近に位置している。

調査区の基本層序は、上から順に層厚0.9mの盛土、0.1mの旧耕土、0.2mの旧床土を経て、暗茶褐色シルトの遺構面に至る。

検出した遺構は全てピットで、2～3期の重複をみせるものがある。調査区が狭小なため掘立柱建物の全貌は明らかでないが、S P 1と8がつながりをみせることから、建物は南北軸に対し東に約30度振れており、栗太郡主条里の属性が強くなっている。

ピットの成立時期は、S P 1・8では遺物の出土を見ないが、重複関係で後出するS P 2・3・5では10世紀後半から11世紀前半の土師器や黒色土器塊が出土している。

手原遺跡中枢の官衙機能は9世紀代には失われ、11世紀代には手原条里を踏襲した一般集落が展開したことが知られるが、今回の調査で同時期に栗太郡主条里に沿った集落の展開が認められることが明らかとなった。

（藤岡）

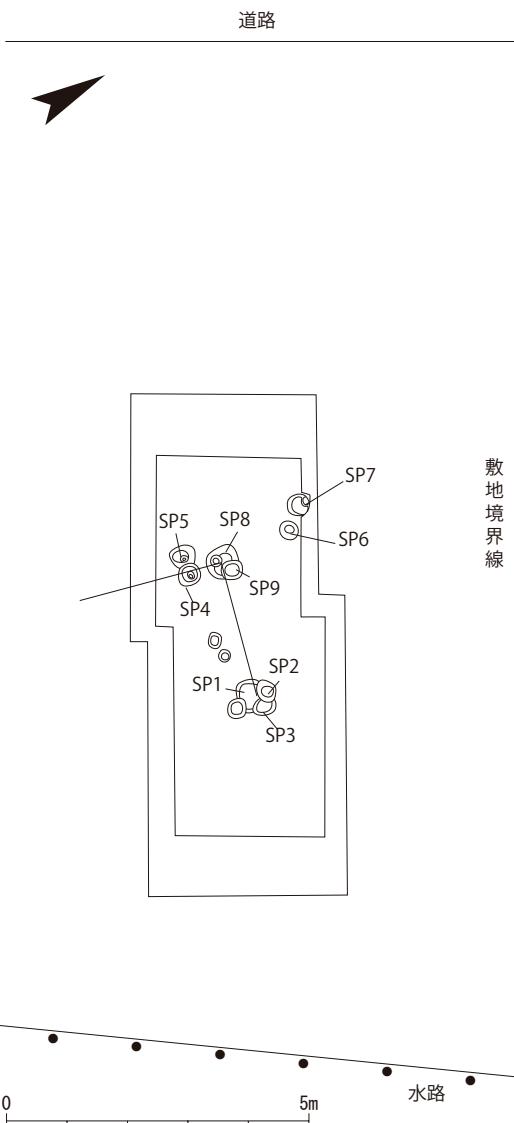


図15 手原遺跡 遺構図

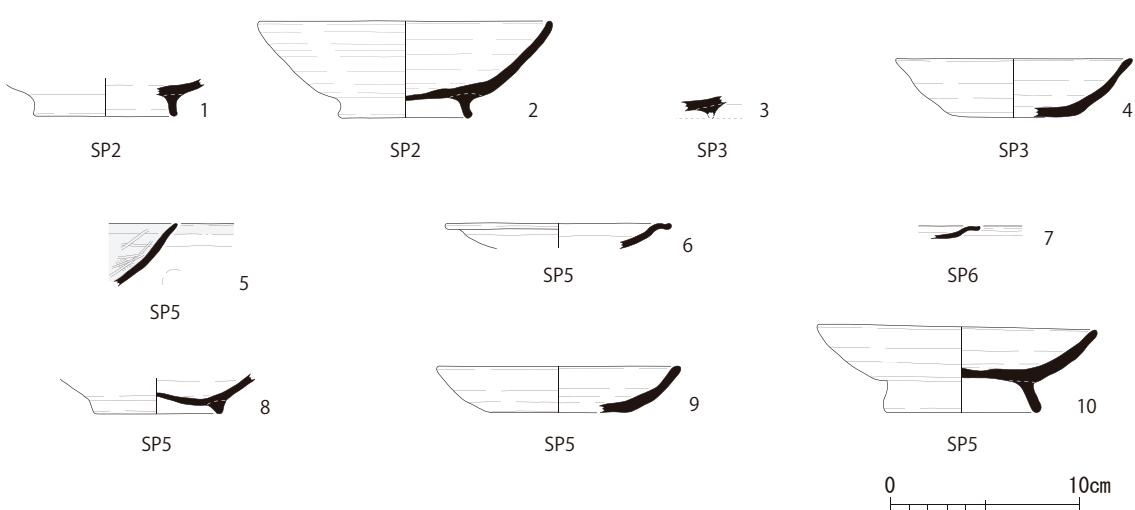


図16 手原遺跡 出土遺物実測図

**栗東市埋蔵文化財発掘調査報告
2021(令和3)年度 年報**

発行日 2023(令和5)年3月31日

編集・発行 栗東市教育委員会
公益財団法人 栗東市スポーツ協会文化財調査課
〒520-3011
滋賀県栗東市下戸山47番地
栗東市出土文化財センター内
TEL 077-553-3359
FAX 077-553-3514

印刷・製本 大津紙業写真印刷株式会社

